

仮面ライダーNewジオウ(二次王)

ぱんどら組長

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『時代を盛り上げた様々なバーチャルYouTuberたち。

その輝きが今、未来へ受け継がれる！

祝え！新たな王の誕生を！』

く液晶画面を見る時には部屋を明るくして見てねく

…この物語はとある少年の「異世界転生」ならぬ「二次元転生」の記録を書いた作品です。この少年の行先を見届けましょう！

ちなみに主は小説を読むのは得意ですが書くのは少し苦手です。色々語弊があつたら指摘してください。

それではお楽しみください♪

目次

プロローグ

《突飛な始まり》 1

聖者の誕生編

《謎がoverflow》 4

《こつちが回るんかい》 7

《ライダーじゃなくてライダー、ね?》 10

《恐怖心、僕の心に、恐怖心》 12

《―VTuberたる者―》 14

《託された心、力となりて》 16

聖者の邁進編

《摩訶不思議ライバー生活(1)》 18

《摩訶不思議ライバー生活(2)》 20

《摩訶不思議ライバー生活(3)》 23

《摩訶不思議ライバー生活(4)》 25

《モニターさんの思考と僕の新しい決意》 27

《ぼくのかんがえたかつこいい変身ポーズ》 29

《編集操作やってみた。》 31

《これ食べる?》 33

《モニターさん復活》 35

《聖者の邁進》 37

聖者の探検編

《ぼりぼり山登り》 40

《岩砕き》 42

《謎のノートパソコン》 44

《つぼ ツボ 壺》 47

《アイアンなヤツ》 49

《これが修行（壺おじ）で得た力！》前編 51

《これが修行（壺おじ）で得た力！》後編 53

《山岳からの帰宅》 55

聖者の建築編

《ニユジオ不動産 木を切る》 57

《ニユジオ不動産 取引相手に出会う》 59

《ニユジオ不動産 取引内容を知る》 61

《ニユジオ不動産 取引をする 前編》 63

《ニユジオ不動産 取引をする 後編》 65

《ニユジオ不動産 知恵を得る》 67

《マネーシステム》 69

《ニユジオ不動産 家を建てる》 72

聖者の同類編

《雪原探検！》 74

《出会う2人 前編》 76

《出会う2人 後編》 78

《凄まじき天賦》 80

《やらかした豪傑》 82

《努力した天才》 85

《閃いた凡才》 87

《努力の賜物》 89

《崩れる！流れる！雪崩出る！》 91

《頼り頼られ》 94

《ご賞味ください！私の努力を！！》

96

《雪原大戦争 (1)》

98

《雪原大戦争 (2)》

100

聖者の挑戦編

《出発準備》

102

《雪原、なのか…？》

104

《謎の記録》

106

《遺跡の守護者》

108

《炎操者の試練》

110

《神秘の粉雪》

112

《対抗の熱き力》

114

《大戦の前夜》

117

《再戦》

120

《雪原大戦争 (3)》

122

《雪原大戦争 (4)》

124

《雪原大戦争 (5)》

— Burning We Soul —

126

《終戦と将軍の記録》

129

《帰ろう我が家へ！》

131

聖王の初心編

《王への道》

134

《五月蠅いの、再来。》

136

《同居人は小金持ち》

138

《豪快！ショッピング！》

140

《新たな刺客とインストール》

142

プロローグ

《突飛な始まり》

時は2022X年 俺は高校二年生のごく普通の学生だ。いや、
だったと言わなきゃ：

毎日バーチャルYouTuber、通称「VTuber」やゲーム
に明け暮れる日々。あー、あと最近の仮面ライダーとかに興味を持つ
てる。ちっちゃい頃見てた仮面ライダーが平成10作品目だったの
にもう20作品目だよ：というこで遅くも仮面ライダーマイブ
ム。

そろそろレンタルした仮面ライダージオウの円盤を見終わりそ
うだった。この日で最終話。推し活の合間に見てたから長く感じた
なあ。というわけで最終話を見る前に中古ショップでDXジクウド
ライダーを買ってみた。かなり状態が良かったので満足そうだ。
きつとこの時は最終話を見終わった後感傷に浸るために買ったのだ
ろう。

ん？そろそろ家の近くみたいだな。：始まりか。そろそろ俺の
懐かしい景色を見れるのは終わりみたいだ。

さて、俺は一旦仕事に戻るとするかな。”君”はまだ見ていてく
れ。その頃の記憶は強く覚えているからな。

あー、外が完全に囲まれてるようだな：これは面倒だな：ブツブ
ツ：

「いやー！お買い得だった！」

左肩に学生カバン右手に箱らしき物が入ってるビニール袋を持ち
ながら僕はついつい嬉しくなって口に出してしまふ。この時間帯に
この住宅街には人が外にいないので大声を出しても大丈夫、：ん。い
や、いたな、人。通りかかった家の庭で遊んでいた幼い男の子に不
思議そうに見られている。見るな見るな：恥ずかしいツスから：

そんなこんなで家に着く。さてと、荷物置いてジクウドライダー用

意して、円盤をパソコンに入れて、とよし見よう！んゝその前にライブバーさん達の配信状況は…

「ん？」あれ？YouTubeの『あなたへのおすすめ』にライブ中のライブバーさんいない？

身体から変な汗が出る。「登録チャンネルは？」

VTuber関連だけ奇妙に無くなっている。「けっ、検索は!？」

『検索されたワードは見つかりませんでした。』

…いや、嘘だろ？冗談なんじ…！

今気づいた。よく見たら部屋にある少なくとも結構高かったVTuber関連のグッズやアイテムが消えている。多分クローゼットに入ってる抱き枕とかもないんじゃないか…？

虚空に浸りつつまたパソコンの前に座る。とにかくなんでもいいから色々検索してみる。フォルダーも見てみる。

ない。

数分後、僕はデスクトップ画面をぼーっと見たままただ椅子に座っていた。

そしてソレは唐突に起こった。

ぼーっと画面を見ていて気づいた。いや、だからこそかもしれない。

デスクトップ画面の端に今にも消えそうな蛍光灯のように点滅してる不思議なアイコンが。

見てみるとそれにはソフト名が書いてなかったが見た瞬間身の毛がよだつような感覚になり思考の中に大きく

《ゲート》

、と映し出されている。

マウスを持つ手がカタカタと震える、このアイコンを見ていると自分の全てが吸い込まれそうになる。

気づいた時には手が震える中マウスでカーソルを合わせ

『カチッ』

押してしまった。

次の瞬間。いや、瞬間なんて例えられない。それほどの早さで

僕は奈落に落ちていた。

聖者の誕生編

《謎が overflow》

「ヌアルアッ、アッ、アッ、ーイー！」

絶賛奇声発声中の奈落落下中、僕は叫ぶことしか考えられなかった。もうね、やばいよね、中学の時の修学旅行先の某夢の国のアトラクションよりキツイ。だって安全装置も何も無いもん。アニメとかではよく背中が下で落下する人達多いけど今更ながら羨ましいと感じてしまう。なぜならスカイダイビングのように大の字になりながら落下してるからね。ふ、風圧が…。ああ、今のうちに目でも閉じて家族に向けて祈ろう。「母さん…父さん…ばあちゃん…じいちゃん…」

…もう祈り出してから何分たっただろう、近所の犬のレオにまで祈っちゃったよ…。あとは…って着地いつ？無限落下編なの？

そーっと目を開けてみると目の前には黄緑色のガラス板に「ロード完了」「OK」

と、書かれている。…なるほどね、この「OK」を押さないと永遠に落下するわけか。もうこの落下慣れちゃって無心でもいられるほどまでになっちゃった…。

奈落の先は地獄なのか深淵なのか…、やって見るしかないよね！

そうケツイをして僕は「OK」を押してみた。

「やつと出れたあ！シャバの空気は美味い！これホント！」なーんて言いながら目の前に広がる広大な草原を見る。

美しい。結構休日はインドア派だからこの景色はすごい！

まるでオープンワールドゲームのような感じだ…ん？

さつきから妙にスースーするなと思ってたら、うわ、上半身裸!?下も異様にピッチリしてる水着!?なんか近未来的だな…。にしても下半身に違和感が無いと言うかなんというか…

ちよつと水着の素材やら伸縮性を確かめるため水着を伸ばしたり

してふと水着の下を見ると…。

アレが無い。男性ならついているアレが。

え？まさか？と思いい股を触ってみる。

ソレも無い。女性ならついているソレも。

もう混乱して地面に膝を着き額に手を当てる。

手に硬い物が当たる。ダツシユで近くの小さな池に近ずいて池の鏡面を見る。顔全体を覆うのは凹凸の少ない水色の仮面。目の部分には「一バイラ」と黄緑色で書かれている。

なんだ？「いちばいら」って…ん？あ、そうか鏡面か、て事は…「ライバー」？でもこの変な柄どつかで見たような…

「あーじ、ジオウー」完全に混乱してて思い出せなかった。「え？でもライバー？」

『テイリン♪』

「うお！びっくりした！」奈落を出る時に見たあの黄緑色のガラス板？が突然現れた。

《二つのキーワードの詠唱確認。ライバー名「未定」に「ギフト：始まりへの一步」を贈りました。機能が追加されました。インベントリに「ライブウオッチ：ブランク」「キーアイテム：??」が追加されました》
《30分後に警戒レベルが1上がります》

「…機能の使い方が自然にわかる…」僕は念じるように言った。「プロファイル！」

空中に文字が並ぶ。

〔種族：聖人　ライバー名：未定〕

わしや聖人でしたか。ならあの下半身事件にも納得だよ。

そしてとても気になっていたもう1つの機能。「インベントリ！」

白色のガラス板のような物、もとい特殊なモニター。

モニターの中に手を突っ込み入手したアイテムを見てみる。ひとつはブランクライドウオッチと特に見た目も変わらないブランクライブウオッチ。

そしてもうひとつはホワイトとブラックの色と変わってクリアブルーとホワイトの色をしたドライバー。その名も――

『ジゲンドライバー!!』

《こつちが回るんかい》

「これが…ジグンドライバー…!」

自分が着けている仮面とお揃いの色、これまた未知の素材の触り心地、見た目に反しての驚きの軽さ、少し透けて見える中は何も入っていないく文字が映る液晶画面も違う素材。まさにこれこそ想像上にしか存在出来ないドライバーだった。「そしてなんて言っても…」大人サイズ!CSM化したジクウドライバーもこんな大きさなのかな?とりあえずテンション上がる!!

「…つといけないいけないそれよりも大事なこともある。まず警戒レベル?ビルドのハザードレベルみたいなもん?それってヤベーイ!!(声真似) じゃん!」

「警戒レベルが上がる」その言葉対して心が無性に震える。武者震いなんかじゃないビビってんの、これ。

要するにこの世界にはこれから「警戒すべきナニカが出る」つまりグロンギやらオルフェノクやらインベスみたいな怪物が出るかもしれない。この歳になって特撮を見ると怪人とか怪物は少し特殊スーツ感がある。

だがどうだ、子供の時に初めてテレビで見たそれらには恐怖しか感情が湧かなかった。それをまた、しかもリアル感マシマシで見ることになる。

怖い。

体は完全に冷えきっていた。だけどー

片手に持ったジグンドライバーは優しく暖かい感じがした。そうだよ、僕にはこれがあるじゃないか。

「まだ希望は捨てきれないな…」僕はそう言いながら残り少ない安全な時間を周りの捜索に使うことにした。

近くにあったほぼ全壊している家屋に来てみた。全壊している理由は火事(?)みたいだ。たくさん焦げていて見る影もない。どうやら作業小屋もあるみたいだ。こちらは半壊だが、石で作られていたのも多くあり少し物が残っているようだ「ホント何も無いな」なんて

つぶやきながら苔むした作業机についていた引き出しを半分開けると、「ゴトツ」と音が鳴った。なんかありそう。開けてみると見たことある黒いアイテムが。「ブランクライド：いやライブウオッチだー！」言い間違えてないからセーフ！

これで二個目だな、と見ていると『ティリティリン♪x2』
と、突然出たモニターから地震速報を思い浮かばせるような警告音がなった。見てみると

『残り安全時間、12、11、10…』と、カウントダウンが、できるだけ何も無い平坦な場所にダッシュする。カウントが1になる、0になる…。

『警戒レベルアップ。お気をつけ下さい。』

警戒レベルがアップしても特に異常はなかった。

目の前には。

後ろから足音がする。僕は後ろを見て相手から距離を取った。

そこに居たのはゴブリンと狼を足して二で割ったような怪物がいた。すかさずジゲンドライバーをとり腰につける。ベルトの帯が腰を巻く。初めて手に入れたブランクライブウオッチを取り出し…ん？

そこにはブランクではなく自分の仮面をちよつと変えたような絵が描いてあったライブウオッチだった。

最初は戸惑っていた狼ゴブリンが飛びかかって来そうだったのでやばいと思った。その時流れるように右手に持ったライブウオッチを素早くミスなく装填しドライブのロックを解除する。

ピンチの時の人間ってすごいんだな…いや今は聖人か。
と思いながら「変身!!」と叫ぶ。

突如ベルトではなく自分が360度回転(何度も)してることに気づく。そしてドライブバーから

『カメーンライバー ニュ…：ジオウ!!』と変身音。その終わりとともにピタツと体の回転が止まる。

体には今までになかったサイバースーツが現れる。

自分のライバー名が考えていたのと同じだったのですごく感動。

変身した時に体の回転によって出た突風によって狼ゴブリンも少し吹き飛ばされている。

戦闘準備完了。だが、戦う前に言わせてほしい…

「こっちが回るんかーい!!」

《ライダーじゃなくてライバー、ね?》

変身完了した僕は先程自分の起こした突風で吹き飛んで体制を崩した狼ゴブリンを見据える。と、言うところで連絡が入った。『初変身完了。「ギフト・新人の心得」を入手しました。機能が一部追加されました。』

いいとこなのにな、と思いつつ目の前の状況が理解出来てないような狼ゴブリンよりもつとインパクトのある物の存在を確認した。それは何度も見たことのあるもの…、V配信でよく見るコメント欄だった。Newジオウのカラーを元に作られたデカイモニターにデカく文字がゆつくりと追加されていく。内容は『お、誰さん?』『がんばえー』『今北産業』などよく見るコメントだった。まあよくわかんないからここはスルーしよう。でもこれ誰からなんだ…?

まあまず先に攻撃ふっかけよう。武器、武器…あれ?

そんなこと思っていると胸にすごい衝撃が入る。吹っ飛ぶ。痛い。前を見ると狼ゴブリンが蹴りを入れたようなポーズをとってた。戸惑う僕を見て下品に喜んでいいる。戸惑っているのはダメージだけじゃないんだけどね。なぜかって狼ゴブリンの頭の上には『8』と数字が書いてあった。なにこれ?レベル?だとしたらメチャ強じゃん。『相手の世界から吸収したVTubeerたちの「いいね」「高評価」「登録者数』です。』と、モニターさんが言う。なるほど少ないね。僕でも勝てそうな気がする!

『ちなみに「ライバー名:Newジオウ」の数値は0です。』

ワイ格下なのかよおお(; ; ; ;)

ちよつとテンションは下がるし気になるワードもあるけどまず戦闘や、やられてるばかりじゃダメだ!!

コメント欄には『おっおっ?』『よくわからんけど立てー!』などのコメントが。ちゃんと連動してるらしい。

体やインベントリの場所という場所探したけど武器がないのでとにかく素手でやろうか。

最初の戦闘は酷かった。殴り殴られ泥試合。でも相手の素早い動

きも慣れてきたかな？と思う。ということを考えていたところで相手消滅。まあ未知の硬い素材で作られたガントレットで殴ってるわけだから威力は高いよね。

コメント欄でも『もつと上手くできるでしょ』とか『回避って言葉知らないの？』と、なかなか辛辣だったが一部の格闘技好きからは結構高評だった。こんな泥試合でも喜んで見てくれたのか…ちよつとジーンとしてしまった。

『ライブ終了まで数十秒。一言挨拶しましょう』

っえ？アイサツ？考えてないよそんなんで、迷った末。

「今回の配信見てくれてありがとうございます。またやるかもしれないのでま、また見てくださしいつ」

と、言うところまでライブが終わって変身解除された。

噛んだしなんの変哲もねえことを言っちゃったよ…

けれどコメント欄は高評でも不評でも最後まで0にはならなかった。ライブが終わったあと、僕はそんなコメント欄を見ながら不覚にも寂しさを感じてしまっていた。

ライバーか。ライバーなんだな。

僕が見てきたV T u b e rさん達の初配信もこんな感じだったんだらうか。

今度は盛り上げたい。

そんなことを考えていると夕方になってきた。さっきの作業部屋で休眠でもとるか…

その時の僕は知らなかった。狼ゴブリンの数値の低さの理由を、恐ろしい生態を。

《恐怖心、僕の心に、恐怖心》

夕日がかなり落ちてきた今、僕は体を休める準備をしていた。初めての戦闘でもあり、初めてのライブ配信。なかなかハードだった。

「これは骨が折れる仕事だ…」

誰もいないのでぼつんと口に独り言を放つ。

体を休める準備。これなんだけど初めてモンスター、いやしえ、しえ…

なんだっけ、モニターさん使って実績を振り返ろう。

(唯一会話?ができるからモニターさんって呼んじゃってるけどいいのかな?…)と、思いながら先程の戦いで得たギフトや機能を見るためモニターさんをスクロールする。

「あつた…」『ギフト：初シエイド討伐』『ギフト：初配信終了』あとさっきの戦闘中の…『ギフト：新人の心得』。そうそう、「モンスター」じゃなくて「シエイド」ね。まず機能が追加された「ギフト：新人の心得」なんだけど『対象のVエネルギーの表示』『所持金の表示』が追加されたっぽい。Vエネルギーってのは狼ゴブリンの頭上にあつた『8』とか僕の『0』とか。…今は『5』になっただけだね。簡単に説明するとドラゴンボールの戦闘力みたいなモノっぽい。所持金は視聴者さんがくれる『スーパーチャット』とかシエイド達の持っていたお金とか他にもあるけどそこから手に入るお金だね。ちなみに現在682円。…びみよい。んでシエイド討伐のギフトからは傷口回復ポーション3つ。飲むとしたけど蓋をポキッと開けたらデフォルト仮面(変身前につけてるお面)に吸収された。まあこの仮面もなぜか取れないし喉も乾かないからいいけどさ…。初配信終了のギフトは寝るための近未来式寝袋!これ嬉しい。寝心地も良さそうなのも何よりだけどなんと言っても防寒もしっかりしてるし寝てる間に体力や傷を回復してくれるバフが着くと言う!今回1番の収穫はこれかも!…思ったけどこの2つのギフト別々の瞬間に取る方法もあつたのかな?まあ終わったからいいけどね。

さてとそろそろ寝ますかね…明日は何が起きるのやら…。

「Z z z」

その一方で草原を駆ける謎の人型の群れが1つ。深い緑の体毛に鋭い爪、凛々しい顔。狼の要素を取り入れたようなその者らの名は「ゴブルフ」。その群れが今日指しているのは同胞の仇。そんな彼らはついに獲物を遠くに捉えた。

「Z z z…」『トトトトト…』「Z z z…ん、ん?」『ドドドドド!』ん?なんかこつちに向かって来てない!?やたらと地面から音がうるさいんだけど!?

僕は即座にくるまつている寝袋をインベントリに入れて音源を見据える。きらりと黄土色に輝く瞳フサフサの深緑の体毛。間違いない昼間に出会ったシェイドだった。(明日になる前に面倒なことが起こりそうだ…あれ?)

聖人になったからか暗い夜でも視界が明るい。だからそのシェイドの後面にいるおおよそ10体程の同じシェイドも目に見えた。

『ライバー名: New ジオウに警告。シェイド「ゴブルフ」の群れです。』

モニターさんが無慈悲にそう伝えてきた。

あつという間に囲まれてしまっていた。逃げ道は、無いに等しい。「どうしよう…ああ…終わった…かも?」

『シェイド「ゴブルフ」の死亡に伴い発動する「スキル・地の果てまで」が発動されています。』

僕は苦笑いを浮かべ、昼間よりも震えながら宣告された言葉を聞く。

こうして僕とゴブルフの真の戦いが始まりを迎えた。

《―V Tuberたる者―》

この状況はまずい。

僕を囲んでジリジリと責めよってくるゴブルフ達。これってヤンキーにやられることとまったく同じじゃないか…(体験したことないけど。) まずはここから脱出せねば!

うおおおおおと掛け声を出し前に進みながら変身。この際変身ポーズなんてとつてる暇はない。前進しながら変身するため、僕の前にいるヤツはいきなり僕が横に360度回転し出して突っ込んで来るため避ける。まず前進しながら変身完了、配信開始。多少群れとも離れることも出来た。ここからはこれに限る…

「ふう…逃くげるんだよお〜ッ!」

敵前逃亡。これしか無かったしこのセリフが言いたかったのもある。僕は走り出した。だがその瞬間目の前に三体程のゴブルフ達が回り込みそのうちの一体が腹部に右ストレート。こつちが相手方向へ走っていたからダメージも増す。「なんだよその速度…」腹部を抑えながら背後にステップを取る。が、それを意味するのは他の八体程のゴブルフの元へ戻るということ。戦闘なんてここに来るまで、した事はあまり無かった。というかそれは戦闘とは言わない、ただの一方的な攻撃。中学生の時に虐められてたことを思い出す。

もうこの戦いは昔の事をフラッシュバックさせられる。

地面に仰向けにされて、蹴りをいれられながら昔の事を思い出していた。突如腹部を勢いよく踏まれ、現実へ戻る。

もう駄目なんだね…僕。

視界に入る満月を見ながらそう思う。満月に映る兔。こつちの世界にもあるんだなあ。そう思いながら頭がボヤーっとしてくる。

『やっぱ雑魚だったなー』『なんの配信かわからんだけど』『乙乙W』
脳内でコメント欄が表示されている。

配信終了か…

こつちの世界でも、僕は変われなかったようだ…

『V Tuberたる者コメント欄の見逃しは厳禁ですよ。』

目を覚ますと、そこは黒い空間、大きく映るコメント欄。

あああ、ここ記憶の中のな？走馬灯かな？

コメント欄の近くに女の子がいる。女子高生かな？ぼやけて見えてよく分からないけど驚きはなかった。

『ほら、よくコメント欄見て。』

そう言われて素直にコメント欄を見る。何となく僕がリンチされてる時のだと感じた。

馬鹿にしているようなコメントが沢山並んでいる。でもよく見るとぼろぼろと応援の言葉もあった。『負けるな。』『勝手に終わるなよ』『ここで男見せてみるよ！』

ちゃんと応援してくれた人いたのか…

『しつかりと見えたでしょう？VTube rは皆さんの期待に応える仕事なんですよ。それがたつた数人でも。』

女の子はそう言い何かを僕に手渡し言う。

『わたくしの力託しましたよ。さあ立って、皆さんの期待に応えてくださいよ？』

ぼやけていた顔が鮮明に映る。それは何度も僕を励ましてくれていた存在の一人だった。

「あ、あなたはーッ」

目を覚ますとゴブルフ達にリンチされていたところだった。体力は無いに等しい。だが左手にある新しいウオッチから気力が送られてくる。

僕は思い切りウオッチのボタンを押した。

『つぎのひと
月ノ美兔!!』

《託された心、力となりて》

『つきのみと
月ノ美兔!!』

手に入れた月ノ美兔ライブウォッチをすかさずジグンドライバーの左側にセットしてドライバーのロック解除ボタンを押す。

すると、いつもの回転とは違う現象が起きた。体が浮きはじめる。

『シエイカータイム!!』(なんかいけるかも!)

浮いた体が今回は縦横無尽に360度(これも何度も)回転する。装着しているNewジオウスーツの内側、つまり僕の肉体が不思議な感覚に包まれる。

そして回転が終わり地に足をつける。『臨時スキルを追加しました。』あれ?なんにも変わってなくね?と、思っていた瞬間。

身につけているスーツが爆ぜた。

スーツが爆ぜた事によって変身解除したかと考えていたがどうやら変化があったのはスーツの内部のようだ。私の服装は色彩はNewジオウスーツが元となっているが格好は間違いなく女子高生だった。「ん?私?」

あれ?なんかわかんないけど自分の事私って言っちゃう。ウォッチの効果すごいですね。

じゃあ第2ラウンドを称して言わせていただきますしよう。

私は傷薬ポーションを1つ消費してから言う。

「起立・気をつけ!!こんばんは、Newジオウです!」

回転とスーツ爆ぜで怯ませたゴブルフ達も体勢を整える。

「武器・ツキノキネ」召喚!」そう言う手元に黒い杵きねが召喚される。黒いがちゃんと委員長デザインのデザインになっていてオシャレだ。

見とれていると三体ゴブルフ達が殴りに来る。

「遅いですね。」そう言いカウンターを放つ。

それを見た他のゴブルフ達は驚いた様だった。しかし原理は簡単。

「私のVエネルギーは臨時的に上がっています。私のVエネルギーは『47』です。」

ドヤ顔でどこかの軍団長みたいに言い放つ。

そんな言葉など関係ないとばかりにまたゴブルフ達が来る。もしかしてVエネルギーが低い存在って知力も悪いのでしょうか。

杵を下から振り上げヒット、からのタックル。委員長の力の効果なのか洞察力が上がっている。一斉に来たので杵をぶん回す。できるだけ敵を一点に集め必殺技を放つ準備。ドライバーについているウオッチのボタンを押し、ドライバーのロックを解除し私は一回転。『《それゆけ!》デイメンションブレイク!』

三日月のような弓から自身を矢のようにして放たれたキックは一点に集めたゴブルフ達を葬る。

こうしてゴブルフ達を倒せたのは日が昇る頃となっていた。

ドライバーを外したあと僕は草原に横たわっていた。あの頃の自分にはできなかつたことが出来て少しばかり嬉しかった。空に向けて掲げた委員長のライブウオッチを手に、「ありがとうございます!! 貴女のおかげで変われることが出来ました!!」ここにはいない彼女へそう言った。

僕の心を照らすようにウオッチに反射した太陽の光がやわらかく輝いていた。

聖者の邁進編

《摩訶不思議ライバー生活（1）》

ん？どうかしたのかな？

：ああ俺の記憶の一部、もう見終わってしまったのか？次に何があつたか早く知りたい、かあ。：？いや、続きはちゃんとあるよ。でもこんなに早く俺の始まりって終わったのかい？：なるほど寝る間も惜しんで見てくれてたのか。よっぽど気に入ったのかな？それとも“君”の仕事のため？

：まあどちらにせよ、ん？：ごめん、急な通信が入ってきた。仕事じゃないけど少し急ぎの用事だよ。行ってくる。

：もうお菓子が無くなったのか：甘味は貴重なんだけどな：ブツ
ブツ：

「ライバーキック！」「ギシッ」

うん。いい感じかも。コメント欄もちゃんと見て：と。

僕はゴブルフの群れを倒したあと少し休んでからちよつとしたライブ配信をしている。寝る必要が無い種族、聖人だから少しゆっくりするだけで体力は回復する。もちろん寝た方がいいんだろうけどちよつと昨日の夜の怖くって：またゴブルフらが来るかどうか分からないからこうやって木に向かって蹴りを入れてるわけ。

「ライバーキック！」「ミシッ！」

もちろん変身もしてる。変身したら配信が開始。これが配信の始め方みたいなもんだし。コメント欄からの質問も答えて、指導コメントも貰ったりしてる。なにも戦闘だけが配信内容だなんてそんなバトルジャンキーなライバーって嫌でしょ？：お？そろそろ：！

「ライバー！！キック！！」「メリメリメリ：ドダーン！」

木がついに折れましたー！いえーい！

『すげえ！』

『まさかの目標達成！』

『上達したな』

コメント欄も賑わう賑わう。

「出来ましたよ！みんなも応援ありがとう！」

ところでコメント欄の人達って地球人なのかな？やたらとこんな事象に順応しすぎじゃ…？

『まじで出来たのすごいな（？900）』

お、スパチャだ！

「スパチャありがとう」

『キーワードを確認。「スキル：スパチャへの礼儀」を獲得。』

うお、いきなりだなモニターさん：スパチャに感謝したのが獲得条件なのかな？それにしても効果は…？

『「スパチャへの礼儀：スパーチャットに感謝すると筋力と精神力が小up気力微量回復 能力upの重複三回』

コメントを返しながら確認しているが最初のスキルがこんなものかよ。ゴブルフのスキル名の方がカッコいいよ…

まあそんな不満言える環境じゃないけどね…。

「それじゃあここら辺で配信終わろうかなあ。じゃあね。」

配信の終わりの挨拶諸々考えないとな…

「ふう…ところで折ったこの木どうしようかな」

そんなこと言いながら触ってみる。

『「アイテム：少し柔らかめの木』

はい？

《摩訶不思議ライバー生活（2）》

え？アイテム？『少し柔らかめの木』ってなんか頭悪そうなネーミングセンスだな…。

まあ確かに少し柔らかめの木なんだけれどもね？。アイテムって事はなにかに使えるのかな？というかインベントリに入るんだろうかこれ。

持ち上げてみるか…思った以上に持ち上がるが結構重い…いや、普通に考えて人間は普通の木って1人で持ち運べるか？さっきまで変身してたから感覚がこんがらがるなあ…。かと言って変身したら変身したで配信始まるからなあ。全身サイバースーツ野郎が木を持ち上げる動画って…ワンチャンあるかと思っただけどないわな、誰得やねんな。

「いやこれどうしょ…あ。」

アイテム触つてると「インベントリに入れる」っていう事出来るじゃん。アイテムなんか触ったことブランクライブウオッチ以来だからそんな知識なかった…というか覚えてなかった？あの時警報とか鳴ってたからな…。

「まあ昔の話(昨日)の事はいいとして、これちよつと入れてみるか…」

これは脳内で「インベントリに入れる」って唱えればいいのかな？

『シュツ』あれ、入った？

「今のも唱えた事になるのか」

手をかざしながら考え事してたからなのかもなー。

「んじゃあ、インベントリ！」

おお入ってる…けどライブウオッチとかが1マスなのに対して3×2マスか…存在感あるね、これ。

でもこうやって何気ない物すらもアイテムとして認定されてるのか…

「アイテムコレクター精神が疼くな…」

片っ端から取れそうなもの取ってみるしかないねこれは。

でも夜だからとりあえず明日で。

敵の予感とかしないし、一夜たったし今度こそ寝たい。

寝なくていいとは言ったが寝たい欲望、つまり睡眠欲はありますのでね。さっさと寝袋準備して寝よつと。

「朝起きたら実は夢だった〜とか…ないか。」

おはようございます。実は昨日眠る直前に軽いホームシックになつちやつた。やつぱり元の生活が恋しい…。

ってそうは言ってられないな。今日はアイテムをコレクティングするって決めたからね。まず朝の準備、は聖人だから特にやることないので出発。気になった草とか見つけたら取るって言う作業だから配信なんか出来ないから変身前状態の仮面と水着って言う格好で草むしりに挑む訳ですけど、誰にも見られたくないよこんな姿。

まあそんな事情というかなんとやらがあつたからシエイドにも見つからずにここまで来れたけど…結構草の種類つてちゃんとあるんだって思った。だってこの「アイテム：緑の草」と「アイテム：緑の草」って名前は同じだけど見た目も違うしちゃんとジャンルがある。

…葉っぱの部分食べてみようかな？

こつちに来てから何も食べてないし、(仮面越しに食べれるのか分からないけど) やつてみる価値はあるかも。

モグモグ…モグモグ…

味は少しばかり苦味があるだけで特に…片方の方は…

ムシャムシャ…ムシャムシャ…

なんだこれハツカ飴みたいな清涼感だな。

「雑草に対してちよつと理解できたかもな…さてもう少『ピロンツ』ん？」

『「ギフト：草生える」を贈りました。それにより「スキル：雑草博士」とVエネルギー『1』を追加しました。』

勝手に草を生やさないで欲しい。というか名前と貰ったスズメの涙程のVエネルギーからして馬鹿にされてるような気がする。このスキルは…？

『「雑草博士：草系統のアイテムの名前、使い道が解る。』

つまりは…？

苦味の方が「苦味草」。
ハツカっぱい方が「薬草」。
まんまでした。草生えるW。

《摩訶不思議ライバー生活（3）》

「スキル：雑草博士」ねえ…」

名前はわかったけど使い道か。「苦味草」は何かな？

『苦味草：料理などに使用』

まあ手に入れた気になった草ってだいたいこれだしな。珍しくないのかも。「薬草」は…？

『薬草：薬剤の作成などに使用』

薬剤の作成!?!そんなこと出来るの? ってここは限られた二次元の世界じゃない事は目に見えてるしな。でもそれ故にほとんど説明とが無いのもきつい所あるなあ、ホント。じゃあ次の草は…

『毒草：薬剤の作成などに使用』

危ねええええ! これ食べてたら僕どうなってたことか…じゃあ一本しか無かった最後! これ!

『珍しい雑草：無い』

いやいや、それはなくない? 雑草だった上に使い道無いとか。かと言って綺麗な色してるからなー、コレクションとして持つところ。

じゃあちよつとやりたい事できたから良さげな場所に行こうか…近くにある良さげな所って言ったらまあ、半壊してる作業部屋かな…?

着いた着いた、まだここに来て二日目だからだいたい移動してきた場所はわかった。それじゃあ誰も見てないからポーズは無しで…

「変身!」

やりたい事はライブ配信、それも雑談配信だ。

「新世界に降り立った聖なる仮面ライバー! Newジオウでーす!」
待っていたかのようにコメントが出てくるコメント欄に「こんジオ
〜」と言いながら雑談を始める。

「今回はねー、初めての雑談配信という事でね、まあ木をへし折ったあ
とした事を聞いて欲しいんだけどね?」と続ける。もしかすると、と
いう期待を持って話してみる。

「さつき草をとってて、薬草を見つけたんだけど…」

と、薬草について話してみる。ハツカ飴みたいな味がしたとか毒草を見つけたけど奇跡的に食べなかったって言う話題を出す。

ここからが本番だ。

「で、手に入れたのはいいんだけど使い方がよく分からないんだよねー」

今回の目的はズバリ『リスナーのみんなから情報を貰う』という事。

「有識者の方とかいたら教えて欲しいんだけど…」と言うと

『有識者』『誰か知ってる人いる〜?』

ってリスナーのみんなも探すようなコメントをくれる。優しいな…みんな…。と、1つコメントが、

『すり潰してみると傷薬になるよ〜』

ありがとうございます…！

「なるほどね…ありがとう！明日配信でやってみようかな？」と言い、それについて応援をもらい話題を変え、雑談を続ける…

〜配信終了後〜

いやー、可能性がありそうだと思ってやってみたら有識者さんがいて驚いた。

朝やったライターキックチャレンジ配信でもコメント欄に向き合ってたためリスナーさん(?)達が元の世界と今の世界の話題がどっちも通じることが確定していたからできた。まず薬を作ってみることを明日の予定に入れておいて…

まず夜になっちゃったし今日は寝ようと思いますかね…

《摩訶不思議ライバー生活（4）》

今日もいい朝だ。もしかしてここは天候が晴れしか無いのかな？
雲一つない訳でもないけどね。

今日はこの作業部屋の机を使って薬剤を作る配信をしよう。見栄えも良いだろうしなにせよ地面にすり潰した薬草を落とさないで済むからね。せっかくだし完成した薬剤を置くために大きめの葉っぱを取ってこよう！いやはや仮面ライバーは大変だなあ…でもまんざらでもない自分がいるんだよねえ。やっぱリリスナーのみんなには楽しんでもらいたいしね、たとえどんな正体だとしても…とは言いきれないけど。

「それじゃあ配信準備しようかな…」

「みんな早い時間に来てくれてありがとう！新世界に降り立った聖なる仮面ライバー！Newジオウです！」

『おはジオ〜』『おはジオ〜』『おはよ〜』

「今日は昨日言った通り初めて薬を作ってみるぞ！という事で用意したのが「薬草」と「毒草」にその辺で拾った「平らな石」と「滑らかな石」を使うぞー。」

「まずは薬草の方から。平らな石に置いて滑らかな石ですり潰す…」
『茎は使わない方がいいぞ』『薬用成分は葉っぱの方にあるからね』『力加減気をつけて〜』

あれ？意外と有識者さんいるな。今回の配信タイトルが『初めての薬剤作りに挑戦！』だったからかな？タイトルについては緊急時にシエイドと戦うとか『緊急事態』じゃなければ変身した後にに決められるらしい。これ知ったのライバーキックチャレンジの時なんだけだね。

つまりはタイトルも大事って事なのか…なるほどなるほど。

茎を取って葉っぱを重ねてすり潰す。話をしながらそれを繰り返す…

ついに全部使い切り完成！「確かに湿布とかに成分とか似てそうだ

ね…でも何とか成功！」

コメント欄も賑わっている。最初に配信した時とかは失敗ばかりで認めてくれた人は少なかつたけど今は成功した分一緒に喜んでくれるからまた頑張ろうって思える。常連さんは少ないけれどね。

「次は毒草やるぞー!!」

こうして配信は成功した。

〜配信終了後〜

いやあ…毒薬の臭い嗅いでみてって言うコメントの言う事聞いて酷い目にあつた…独特で毒々しい臭いだつた…。まだ鼻に臭いが残る。でも面白かつたな。またお薬配信してみるか…

『ギフト：新人薬剤師』を贈りました。薬剤に関する理解をインストール出来ませう。』

との事。もう驚かなくなつたな、僕。インストールってなんだろうか、脳内になな？じゃあ、

「インストールする。」

一瞬間に大粒の雫が落ちたような感覚に包まれる。弾けた水も頭の中に入つてく。

「これがインストールかあ」

なんか癖になるな、この感じ。でも変わった気がしないのは気のせいだろうか？

『続いて、《忘却の中にいる医療従事者》からライブウォッチの欠片が届いています。インベントリに「ライブウォッチの欠片：●●」が追加されました。』

え？誰それ？モニターさんに映る名前のところはバクつてて見えない。うーん。リスナーさんの誰かからの贈り物なんだろうか。さつき有識者さんたくさんいたし。

『続いてー』

まだあるのかモニターさん…。

『配信回数が五回を超えたため配信の機能を意思操作出来るようになりました。』

ナニソレ神なんだけど…！

《モニターさんの思考と僕の新しい決意》

配信の機能を意思操作…って何ができるんだ？配信の機能ってそもそも何？

『YouTube配信に関する事象全てです。』

ん？え、珍しくモニターさんが疑問に答えてくれた！って、それぐらい重要な能力なのかな？んじゃあ…こういう事かな？

「変身！(配信OFF!)」

いつものように変身したけど…コメント欄が無い、ライブ配信OFFで活動成功だ！そうだ、配信に関する事象を全てコントロール出来るなら、た〜と〜え〜ば〜

「雷落としてみて！」

(シーン…)

『配信者としての技能が未熟です。』

え？モニターさんなんでも出来るって言ったよね？ね？

『《要約》ライバー名：Newジオウの意思操作の力不足です。』

要約されてわかったけどさっきは「配信の機能」に着いて聞いた結果で「意思操作」については聞かれて無いから答えてねえぞって事か。モニターさん頭硬すぎるよ…

頭の中でモニターさんにブツブツ文句を言っていると、

『…配信機能意思操作をスキルとして再構築させますか？』

なんか呆れられたように言ってきた。スキルにする意味が分からないけど、良い案があるって事なのかな？

「…じゃあ再構築お願いします。」

『リストラクション中…「オリジナルスキル：エディットコントロールLv1」を贈りました。エネルギー不足のためスリープモードに移行します。』

え？オリジナルスキル？全く訳が分からない。なんでスキルにレベルが着いたの？名前もカッコイイしレベルが着いたから分かりやすくなっただけ！え、エネルギー不足!?

…この察しが合ってるかは分からないけどつまりモニターさんは

僕の為に実在しないスキルを作り、エネルギーを使い果たしてスリープ状態になったと：言うことか。

今更考えたけどモニターさんにとっての僕ってどういう存在なんだ？

自分にとつてはただの便利な説明係さんだと思ってたけど、モニターさんにも謎が増えたな：

「というかここ全体が謎なんだけどなあ」

身近なものや慣れたモノってついつい理解してる気になってしまっうけど案外そうじゃないのかもしれない。

此処に来てからまだ3日しか経ってないけどひとつも謎は解けてないしね。シエイドってなんなのかもわかんない、なんで配信しなくちやいけないのかもなぜ仮面ライダーとVTubeの力があるのかも。見えないふりしてたのかもなあ。

この世界の謎は知る価値もあるし目をそらさない訳にはいかない。行動の範囲を広げなくちやな。

まあとりあえずそんな未知の存在のモニターさんだけど起きたら一応感謝しとくか：

さて、エディットコントロールについて知りたいなあ：

「あ。」

モニターさんいないから説明聞けないじゃん：

これ実は“ちよつとした手助け”じゃなくて“ちよつとしたイタズラ”だったのかも：（苦笑）

《ぼくのかんがえたかつこいい変身ポーズ》

モニターさんからのプレゼント(?)で貰ったオリジナルスキル「エディットコントロール」。多分意味は「編集操作」っていう和訳したらダサイ名前なスキルだけど、せっかく手に入れた訳だから試してみるのが最近、習慣になってるから試してみよう。今日は現在のVエネルギーと同等(らしい雰囲気を持たせてる奴)のシェイドの相手をしてみよう。危なくなったら美兔委員長のライブオッチがあるから選ぶ敵は慎重に見極めないとなあまずプロフィールを開いて今のVエネルギーを確認しておこう。

「プロフィール！」

〔種族：聖人 ライバー名：Newジオウ

Vエネルギー：18〕

やっぱりプロフィールとインベントリはモニターさんと一体化した存在ではないみたい。…にしてもあの戦いの時の自分のVエネルギーは『5』だった。それから配信内容も気にして配信を三回行ってた為、劇的…ってほどではないけどすっかりVエネルギーは上昇してる。2匹くらいのゴブルフだったら戦えるけどあのスキルが邪魔だな…。というか『ゴブルフのVエネルギー8』×2《僕のVエネルギー18》って言う計算で考えちゃいけないな。…多分Vエネルギーにもバラつきがあるだろうし、なんにせよ科学的な考えもあまり通用しないと思うしね。

そうこうしてる間に良さげなシェイドはつけくん

獣型のシェイドだなあ、今変身してるからよく見てみよう。カエル頭のイノシシ？大きさも自分の胸あたりまでありそうだな…。と何かシェイドってナニカとナニカを合体させてるような…いわゆるキメラ？っぽい感じだよな…

この理由もあるのだろうか？

ちよつと変身解いて近づいてみてそこから変身ポーズスタートで配信してみようかな。

そろーりそろーり…気づいたっぽいなここからは配信するか。

(配信スタート！)

待ってましたとばかりに動き出すコメント欄。カエルイノシシも戦闘態勢(?)をとっている。

「今回は戦闘頑張りますよ〜！」

と、言いつつドライバーの準備とウオッチを取り付け変身ポーズの準備、左手を下から上へとゆっくりとあげ右手を右側からゆっくり移動させて某光の巨人の光線を出すポーズをとる。そして十字にした腕を素早く首あたりの前で罰点の様にして

「変身ッ！」

両手をサツと解除しつつ、かつ右手でロック解除ボタンを押す。

体がドライバーを軸として10回くらい360度回転する。

変身完了。

考えた中で1番しっくりくるポーズを取れた。満点だろう。

(…あ、変身後の決めゼリフ!!)

「君はもうブラウザバックできない！」

決めゼリフ即興だったけど大丈夫かな？

《編集操作やってみた。》

『変身ポーズきちゃああああ!』

『なかなか練習したっぽいね』

『決めゼリフも公認仮面ライダー達には劣るけどニユジオらしいな』

コメント欄にコメントがドバーツと流れる。何回みても配信者としてはかなり嬉しい。

でも今はコメント欄より「目の前の猪蛙だな…」

こつちもいつでも行けるぜ的な感じで前脚を動かしたり跳ねたりしている。あの脚はどんな構成で蹄のあるカエルの脚ができているのだろうか。ギョロつとした目でじつとこちらを見つめているが、こつちが動かない限り猪蛙は動かないらしい。まるで居合切りをする前の武士みたいだな…。

だけでもこつちも相手が動くまで待つ訳にはいかない。リスナーさんが待ってるからね。

「こつちから行かせて貰うよ!」

殴りに走り出す、相手も飛びかかりか突進攻撃をしてくる…はずだったが思ったよりも身軽な身のこなしで僕の背後に向かい高く跳ぶ。

「は?」

重そうな見た目猪蛙だがその脚力ほとんどもなかった。素早く後ろを向くが相手はもう突進して来ている。ここは守りに徹するのが得策かと普通なら思われるがここは希望にかけてみた。

両脚に重心を置き、右腕を構えて左腕で相手の眉間を捉える。そして—

「ハアツ! (エディットコントロール!)」

力を込めた拳を放つ。そして鳴る衝撃音。

「ツ! 痛え〜!」

痛みに堪えながら相手を見ると後退りしながら脚を震わせている。かなり効いたようだ。

これは単なる突きではなく、「エディットコントロール・エコー」を

発動しながら出した突きだ。

推測によればエディットコントロールは配信にも戦闘にも特化したスキルだろう。コメント欄でも『すごい音がした』と言っている人も多いし、怪物相手に軽い脳震とうを起こさせているという事が戦闘面でも特化している理由になる。音と言うのは振動であり、それを増長させたため普段よりも高い衝撃の一撃を出せたというワケ。

「ヒュ〜♪これは打撃向けの効果だなあ」

なんて言っていると腹にナニカが巻き付く。よく見てみるとそれは猪蛙の舌だった。こちらを飲み込まんとばかりに勢いよく引き寄せてきた。一瞬まずい、と思ったが1つ策を思いつく。相手は混乱しながら考え無しに引きずり込もうとしている。

「馬鹿め、この技で終わりだあッ！」

あえて体の力を抜き大きく息を吸いエディットコントロールを発動する。

効果は「視聴者音量低下」「音量上昇」そして「エコー」

飲み込まれる前に相手の頭にしがみつく。すごい舌の筋肉だ：

チャンスは1回！

猪蛙の左耳に顔を近づけ、できるだけ大声で

「元氣ですかあああああ!!」と叫ぶ。

更に脳に負荷をかけていく特攻技である。

徐々に相手の舌の力が抜けていき、猪蛙はその場に倒れた。

コメント欄から歓声のコメントが流れ始める。

「猪蛙討伐完了!!」

大きくガッツポーズを決める！

仮面ライダーとしてはカッコよく決めたかったが、ここは配信者として面白可笑しく決められたので嬉しかった。

今回の配信、成功である。

《これ食べる?》

猪蛙は倒したはいいけれど…なかなか塵にならないな…この間倒したゴブルフは倒したらじわじわと塵と化していくはずなんだけど…し、死んだフリとか無いよね!?

ちよつと脈測りますよ〜

「ボアトード：気絶（重）」

「『ボアトード』?こいつの名前かなあ。気絶（重）って事はまだ死んではいない…と。」

『え?気絶?』『ニュジオの技もすごいけどこっちのタフさもすごいなあ』『まじツボ笑』

ん〜困った、こういう時つてすぐ討伐以外にもなにか使い道無いかなあ〜!つて事で有識者アア〜!

『捕獲やな』『手かぎして捕獲つて念じてみ〜』『捕獲は普通に討伐とは違う報酬』

「捕獲…?そんな事ができるのか…」じゃあ試しに「捕獲」…

そう念じるとボアトードはスーツと青い光と共にどこかへ消えた。

「え?何が起きたの?」モニターさんがいないと何が起こったのか分からない。ゆ、有識者アア〜!

『討伐と捕獲ではドロップ品が違う場合があるらしいぞ。』

だそうです。はえ〜じゃあ何落としたかみんなと見ないとね!

インベントリ…えーつと…え?、まじ?

「アイテム：ボアトードの肉（加工済み）」

『肉だね』『肉だあ』『肉ウー!』

「肉…うん。え?で?」

『今日の晩飯?』『食レポしてみて』『食べたら?』

肉…食べてみるしかないのかこれは…

〜夜〜

「はい、という事でレッツ、ニュジオクッキング〜!」

『いえ〜い』『待ってました!』『イヨツ』

「今回はですね、ボアトードの肉焼きを作りたいと思います!という事で…これを使わせていただきます!」

『月つきのみとノ美兔!!』

まずこれでシェイカータイムだ!

体が回る〜

「こんばんワニノコ」

『委員長じゃん!』『清楚にね〜』『イヨツ!』

「まず今回私が使うものは昼に集めた枝と「ツキノキネ」で取ってきた火打石と岩塩です。」

枝を囲んで、火打石近くに置いて…

「づらあ!」「ボツ』

火がついたから鋭い石で食べやすく切ったというかちぎったというかまあそんなボアトードの肉を串に刺して焼いて…

『おお…』『手際いいね』『すごいと思う』

いい感じに焼けてきたら岩塩の塊を…

「づらあ!」「ガツ!」「お”らあ!」「ギツ!」…

『ダイナミック調理w』『すげー!』『これが杵の使い方なのか…?』

「ふう…(息切れ)ここまで細かくしまして…焼いた肉にかけて…」

食べ…、とやおうとしたけどこれ食べてまずかったら嫌だし…猪肉、ましてやカエル肉なんてこの方生まれて食べたことないし…ええい! (今は体型女性だけど) 男は度胸!!

「食べます!」

もぐ…もぐ…、?これは…、むぐ…むぐ…

「美味しいじゃないですか!これ!」

いい食感のもも肉!意外とサツパリしている味で岩塩の塩味が引きだたされて…美味しい!」

『あれ?なんかこれ…?』『飯テロ?飯テロか?』『肉食べたいい〜』

かなり美味しい!もう一本…いや、できるだけ雑談しながら…あ、でも…

美味しく頂きました(^ ▽ ^)

《モニターさん復活》

「ん…ふう、もう朝か…」

昨日の配信は食べ物を食べながらの雑談配信を長々とやってしまったので疲れて寝ていた。久々の食事に少しテンションが上がってしまっていたのかもしれない。

ん、なんか目の前に黄緑のモニターがあるな…ていうかモニターさんはスリープ状態だから居るはずないしいたとしてもなにか報告がある時だし…まだ疲れてんのかな…もう一回寝るか…

なんて思ってたら頭に優しくストンツ、と手刀が入る。

「ん、何…え？」

黄緑色のモニターの底辺りから不思議な黄緑色の腕が生えてた。そしてそこから、

『ライバー名：Newジオウ』、起きるのが遅いです。』

と、文字と共に聞いた事がない男性とも女性ともとれる声が聞こえる。まあ黄緑色のモニターという事で既視感がすごいあったので一応確認してみる。

「も、モニター、さん？」

『ライバー名：Newジオウ』からはそう呼ばれていた記録がありません。』

え、てことは復活したの？モニターさんが？まじで？

『本当です。』

うお！いきなり思考読まないでよ…

『…前からそうでしたが？』

いやそうなんだけど、声があるのと無いのじやなんか違うじゃん…『安心してください、今はシェイドには聞こえていない特殊な信号で話しています。』

いやそっちの心配じゃないんだけどな…

『何の心配でしょうか？』

いや別になにも…、いや、とにかくプライバシーってのがあるじゃん！

『ありませんが?』

ん〜!聞いて欲しくない思考の時と聞いて欲しい思考の時つてのがあるでしょ!ていうかあるんです!人間には!『種族は聖人ですが、』いや!そんな事はいいかちよつととりあえずオンオフつけるから『ライバー名:Newジオウ』にはそのような機能は持ち合わせていません。うん〜!じゃあそちらでできますう!?!『それに類似している機能ならこちらにインストール可能です。』じゃあそれをお願いしますう!『わかりました。インストールしますのでそちらからの思考は読み取れません。Now Download...』

いやこちらから結構で...、つてもう聞いてないのか...。なんだろう、復活して音声つくだけでこんな非常に常識感がでるのか...。

にしてもあの音声とあの謎の腕、どう見てもグレードが上がってる...。一体なにがあったんだらうか。ダウンロードが終わったら聞いてみるか。

『ダウンロード完了致しました。』

(あ、終わった?マイクテス:マイクテス:これでOKな訳?)

『大丈夫です。』

(ところで、なんでスリープ状態から復活しただけなのに音声機能と腕機能が付いてるの?)

『私の製作者と思われる方からアップデートのデータを書き加えて貰いました。』

え?『私の製作者』からアップデート?

《聖者の邁進》

『私の製作者と思われる方からアップデートのデータを書き加えて貰いました。』

(いや、待つて。…製作者？だ、誰だよそいつ、ちよつと心の整理をさせてくれ。)

どうぞ、と言われたので心を一旦無にする。だがどうも心が落ち着かない。まあこれに関しては聞いてみるしかないか。

(質問なんだけど製作者って誰なの?)

『単なるシステムに過ぎない私は到底知り得ません。』

前も思ってたモニターさんの目的についても聞いてみる。

(モニターさんの目的って…なんなの?)

『目的。生命体にとってはそう取れるかもしれませんが私の場合は使命です。それは…』

それは…?

『「ライバー名：Newジオウ」の協力と補助です。』

ん？それだけ？

『思っている通りだと思います』

(え？今、思考読んだ?)

『いいえ、表情から取れる感情を考察しました。読心術です。』

(いやもうあんたには適わねえよ…って表情？僕の変身前の顔も一応お面で隠されてるけど?)

『その仮面もおそらく私の製作者が作ったものかと。』

(いや、なんでわかるのさ)

『私と仮面のソースコードが類似している点があるからです。私はその仮面の内側を見る権限があります。』

(は、はあ…つまりこのすごいテクノロジーのパンツも?)

『はい、仮面と同じです。』

(そうなのか…ん？まさか…《内側を見る権限》とかありませんよね?)

『衣服の下の傷を確認するため、もちろんあります。』

(いや怖っ！この人の前では僕全裸!?全裸なの?)

『人ではなくシステムです。』

(いやそれはわかってるってー!)

とにかくその製作者とやらは僕をどうしたいの?)

『それは知り得ませんが、…これは単なる推測ですがなにか行動して欲しいのでは?』

(いや、『では?』って…ほんとになにも製作者の事は知らなくて、ほんとに僕の協力をしてくれるって事?)

『本当です。私のプログラムには嘘という2文字はありません。』

(…ホントだな?じゃあ聞いてみたいんだけど、「ギフト」って何?)

『「ギフト」とは送られてくるものの総称です。』

(んじゃあ「スキル」は?)

『「スキル」とは開花した才能や元からある特徴に名前がついたものです。』

(「オリジナルスキル」は?)

『簡単に言えば、私と同じ製作者から作られた《スキルシステム》が作った物が「スキル」。私が真似して作り上げた模作が文字通り「オリジナルスキル」です。』

(…なんでくれたの?)

『困っていたため補助しただけですが?』

困ってたからって、ほぼ全エネルギーを注いでスリープしてまで助けるのか…さっきまでちよくちよく疑ってたが実は怪しいヤツじゃ無いのかも。

(まあ、質問は以上だよ。これから配信活動以外になぜ自分をここに連れてきたのか知ってそうな「製作者」を探すことにする。)

『「ライバー名：Newジオウ」の意思ならばそうしましょう。』

(…あ、そうそう。)

『なんででしょう。』

(その呼び方長いからNewジオウって普通に呼んで。)

これからは真の旅のお供として連れていくわけだからこっちの方がいい、という意味もあるけどね。

『文字数で言うならば「ニユジオ」でよろしいのでは?』

(いや、まあそれはそうだけどそれはリスナーさんからの僕の呼び名で…いや、まあいっか。)

『分かりました。ニユジオ様。』

(その代わりリスナーさんのようにちゃんと見ててくれよ?)

『私のプログラムには無視という2文字はありません。』

そう会話をしながら聖者は歩き出す。

聖者はこれからも邁進し続けて行くであろう。

聖者よ、真実に向かって突き進め。

聖者の探検編

《ぼりぼり山登り》

唐突だが現在、僕は岩山を登ってクライミング配信をしていた。理由はそこに山があるから、では無く単純に探索と配信を同時に行っているからである。

始まりは草原から出てみるかそれとも留まるか考えていた時である。

(…ねえねえモニターさん、この草原じゃなくてほかの所に行きたいんだけど、行ったとしてここにまた戻ってこれるかな?)

『はい、ニュジオ様、私にはマツピング機能があるので此処に戻ってくる事は容易です。』

との事で近くの岩山に登ってみてるワケ。クライミング、と言っても安定した足場があればライダー…いや、ライダージャンプして登っているのかかなり素早く登っている。よいこはマネしないでね。道中狭い足場ながらシェイドが襲ってくるが小さめの岩のモンスターなのでツキノキネを使ったり下に転がしたりして難を逃れている。なので月ノ美兎シェイク(シェイクというのはモニターさんいわくフォームの事らしい)となつて登ってる時もある訳だがリスナーさんからの視線が何となく下半身に集まつてる気がする…。まあ安心して、スパッツだ。

そんなわけで順調に登っている。でも道中見かけるシェイドが一種類しかいないのが気になるのでモニターさんに聞いてみる。

(モニターさん、あのちっちゃい岩のシェイドってなんなの?)

『あれは「シェイド名：ミニナムロックガーディアン」です。』

長い名前だな。

『おそらくガーディアンと名前がついている事から此処は彼らの守護地、言わば何かを守っているのでしょう。』

(なるほど、いつものカメラ系シェイドとは異なっているのはそういう事が、ガーディアン系シェイドと呼ぶか。)

そんなことを話していると、崖を登り終えた時、何者からかの投石攻撃を受ける。が、回避できた。

「危なっ！」

投げられた大きな石を見ると、岩でできた足をパタパタと動かしている。

「これは…ミニマムロックガーディアン!？」

そんなの投げられるなんてどんな奴だ…と相手を見てみるとそこに居たのは岩。数秒目(?)があつてしまう。

「モニターさん、なにあれ？」

と聞くとリスナーさんにも聞こえる信号で、

『あれは「スモールロックガーディアン」。ミニマムの上位種です。』

腰くらいまでの高さがミニマムならスモールは自分と同じ高さくらいだ。横幅は何倍も大きいけどね。

ともかくこいつを倒さなければ先へは進めない。

コメント欄から応援のコメントが流れる。

僕は月ノ美兔ライブウォッチを左手に、戦いを挑むのであった。

《岩砕き》

いつもより狭い足場でどう戦うか。それがネツクだなあと思っていると投石（まあ石じゃなくミニmamだけど）してきた。これは避けずに月ノ美兎ライブウオッチを使いシエイカータイム。

「起立！気をつけ！こんにちは！Newジオウです！」

安定の決めゼリフを放ち、Newジオウ 月ノ美兎シエイクへと変身する。

回転してる時は実質無敵みたいな感じなので投げられてきたミニmamも吹き飛ばしただろう。変身待機中ってすげー

とにかく手持ちのツキノキネを使い攻撃。『ガッ』つと音はなるがミニmamのように一く三撃では倒せない気がする。これは「エディットコントロール」を使いながら行動しなくちゃ倒せないかもしれない。スモールロックガーディアン、通称、「石守護野郎」は腕を振り下ろして攻撃してくる。それはバック回避で何とかなる。と思っていたら少し砕けた石の欠片が勢いよく飛んでくる。どうやらその剛腕と岩の地面が衝突により砕けたのだろう。って事はかなりの威力だな！今度もツキノキネで攻撃するが、今回は「エコー」を追加してみる。相手もこれはまずいと思っただろうか、今回は腕でガードしてくる。よって、腕一本は砕くことができた。

『気をつけてください。相手は怒り心頭です。』

モニターさんがそう言うならそんなだろう。顔のない岩の表情なんてこつちからは分からないからね。

そして相手は近くに呼び寄せた（？）ミニmamを投げつけてくる。あまり射的精度はないが今の自分に当たるとかなりの威力となるだろう。何回か避けるがその度に相手が近寄ってくるのがわかった。なので相手を飛び越えて相手の後ろに逃げる。相手は自分の作戦が上手くいかなかったことに対してまた怒っている。今度はこつちでも怒っているとわかるほど体を震わせている。

『あれは怒りに体を震わせているようにも見えますが、あれは体の再生です。』

「え？それ本当ですか!？」

『もちろん怒り具合もさつきより酷くなってますが』

相手を見ると無くなった腕の付け根部分から、新しい岩の腕が生えてきていることに気がついた。

「モニターさん！あいつの弱点は!？」

『解析した結果、本体の奥深くまで大きなダメージを与えると消滅するでしょう。』

「なるほ…」ですがそれにダメージを与えるのならまず腕の破壊をしなければなりません。』

ちよつと石守護野郎の面倒くささにイライラしてきた。

「…ならこうするしかないですよね!」

私はツキノキネを相手に思い切り投げつける。それは両手でガードすることは理解出来ていた。相手の行動はパターン化しているのを見破ったからだ。

私は飛び上がり両腕に力を限りあるだけ込める。そして…

「ライダーダイパンクラッツシュー!」

腕を相手の頭上から振り下ろした。

相手の体にヒビが入り砕け、腕と脚は崩れる。

「…無理ゲーならば怒りを込めて台パンするまでだ…」

こうして怒りと怒りのぶつかり合いは幕を閉じた。

《謎のノートパソコン》

スモールロックガーディアン：かなりの強敵だったな…こいつはなにかアイテムをドロップしてないだろうか。ん？この変な鉱石…いや、宝石？これはなんだろう。

「ガーディアン核石（微小）」なるほど、わからん。

「モニターさん、この石ころって何？」

『簡単に言えばガーディアン達の核、つまり命の源です。』

「いやでもミニマムにはなかったじゃん」

『ありましたよ。』

え？

『ただしミニマム程度なら砂鉄ほどのサイズなので無いも同然です。』

モニターさんはさらに続ける

『正しい加工をすればゴーレムコアという宝珠を作れたりします。ゴーレムはガーディアンの上位互換であり知能面がかなり優れています。』

「なるほど、つまりこの石を使えば自分のガーディアンや加工次第ならゴーレムも作れるってことか。」

『まあ今のニュジオ様にはそんな技能ないのでできませんが。』

「夢壊さんといってくれよ…」

なんて会話しながら頂上を目指す。どうやらさっきの石守護野郎が頂上に行くのを阻止するボスだったらしい。

頂上に着くと不思議な光景だった。

まず頂上にはちよつとした穴ぐらがありその中に謎の板が置いてあった。

「誰か住んでいた…訳でもなさそうだし、…モニターさん、このアイテムの製作者は？君と同じ？」

『いえ、ソースコードは類似してますが…興味深いマテリアルですね、我々製作物とこの世界の物質を混ぜ合わせて作り出されたモノ、と推測できます。』

おお…やっぱアップデートのせいもあってなのか雄弁だな…。

『ですが我々製作物が作り出されたのは最近のことである事からこのマテリアルはいつ作り出された…いや創られたものなのか…』

モニターさんがすごい速さでブツブツ喋ってる。肝心のモニター画面に映る文字も読ませる気ないかのように難しい単語が出てくる。こりゃモニターさん、マイワールドに入っちゃったな…

『…という事で私の力では到底理解不能でした…』

「う？あ、うん、おつかれー」

途中からウトウトしてたなんて言えないな…これ。にしてもモニターさんどんよりしてるな、ここはフォロー入れなければ。

「いや、まあまだこういうアイテムあるかもしれないし、最悪わかんなかったら君の製作者にでも聞いてみよ？ね？」

『そうですね。進まない事を考えてたってしようがないですからね…』

「そうそうー！じゃあ進む事をしようー！じゃあこの板開くみたいだし開いてみよう！なにかの手記かもしれないしね！」

というわけで開けてみた。一面には色々な文字や記号が書いてあるキーボードが、もう一面には今にも吸い込まれそうな黒い画面がある。

「これってノートパソコン…だね。」

起動ボタンを押してみる。

「いやー、パソコンって言ったらここに来る前に吸い込まれてモニターさんにあっただよなあー、懐かしい…ん？《パソコン》？」

嫌な予感がして画面を見ると奈落のような真っ暗な画面がぐにやあと渦をまく。そして僕達はノートパソコンの画面に吸い込まれた。

…うーん、体が痛い…なにかに下半身がすっぽりハマってるな…なんだこれ？壺？…抜けない。というかさつきから近くに置いてあるけどこの長柄のハンマーは何…？

ん？壺？ハンマー？何かを察して辺りを見渡す。変な形をした天まで届くほどの物の山。

これって…

「《壺おじ》じゃねーか!!」

どうやら異次元に飛んでしまったようである。

《つぼ ツボ 壺》

壺おじ…それは1人のおじさんが壺にハマって登場し、ハンマーを手にてこの原理や物理法則を使い不思議な山の頂上を目指すゲームである。パツと見てネタゲーと思うかもしれないが頂上まで登るのは至難の業でありいくつもの挑戦者達はその難しさに心を折られたかそれは数しれない…

で、それがリアルにある訳だ。嘘やろ。

「モニターさんは大丈夫？」

『無事です。』

「なにか説明とかは…？」

『ここは私の知識の範囲外です。』

「いやいや、お得意の推測でもいいからさ」

『まず、ここは先程までとは違う次元である異次元空間であることは簡単に予想できます。』

『簡単に』って言うところ強調されて言われたな…次元の知恵とか僕にはないよ…

「んじやあ僕からも推測だけど、このリアルなゲームをクリアすればいいの…かな？」

『じゃあ、やってみて下さい。』

やってみて下さい…だと…？どうやって？まあ変身してるからコメント欄からヒントを…

『やったれニユジオー！』『頑張れ（笑）』『いけるか？』

いや、何もヒントがない…

これはまず有無を言わさずやれって事なのかな？

壺の中で体の向きは変えられるし…よし！

「うっ！とりやっ！はっ！」

おお…意外と上手く行く…異次元だから世界の法則とか色々変わってるのかな…ってうおお！落ちた！怖え！

「もういつちよ！ぬっ！えいつ！…」

—2日後—

「やつとここまで来れた…ムズすぎるっていかクリアさせる気がするかこれ!？」

「ただ、確実に上手くなってきた。理由はこの修練によって会得したスキル！」

「スキル：遠心力の勘」「スキル：ハンマーの勘」「スキル：根性」

「いやー、ここに来てからスキル手に入れまくりだね、いいね、だが！もう心折れそう！」

『ですがたったの2日で3つのスキルはかなりいい収穫ですよ。…もしやここはスキルを得る為に作られた物なのかも知れないですね。』

「うん、あとは…この鉄塔をミス無しで上手く上げられるかだなあ」

よし！行くか！

「みんな…行くよー！」

「つせいッハッハッヤツぐうううう！」

あと少し、あと少し…

『スキル：ハンマーの勘』が「スキル：ハンマーの使い手」に変化しました。』

ここだア！うらア！行ったア！

『『『『おとおおお！』』』』

みんなで成功を喜ぶ。宇宙(?)を漂いながら感傷に浸る。その時だった。自分のところに向けて小さな流星がゆつくりと近づいてくる。

『《とある魔の研究者》からギフトが贈られて来ます。』

このエメラルドグリーンかいたはるのライブウオッチは…！

『甲斐田晴!!』

《アイアンなヤツ》

これが新しいライブウオッチか…キレイな色だな。

『ニュジオ様。どうやらここから出られるようになったようです。早く脱出することをおすすめします。』

「いやいや宇宙に浮かんでふわふわしてるのちよつと楽しいしもつと楽しませてよ〜」

『…どうやらこの空間、少しづつ無に還っているようですよ。我々が無に飲み込まれる可能性が大いにあります。』

「そ、それ早く言つてよ！えつと出るためには…この浮いてる脱出マークを押せばいいのかな？えいつ！」

脱出マークを押した瞬間、それは黒い渦をまき、また僕らはそれに吸い込まれていった…

「では、ここで配信終わります。まったね〜」

配信をOFFにした。

「うお〜、大変な場所だった〜。あつ、脱出した途端睡眠欲が…」
『相当お疲れのようですね』

「睡眠も取らずに聖人の特性だけで頂上まで乗り切ったからね、早く寝たいし汗はかかないけど水浴びしたい…」

『兎にも角にも下山しましょう。話はそれからです』
「わかってるけど少し！少しでいいから寝させて欲しい！」

『飛行型のシェイドに襲われても私の所為にしないでくださいね。』
「それはちよつと嫌かも…。下りるかあ。」

とりあえず、下山してみると何やら面白いモノを見つけた。それは全身鉄でできたミニマムロックガードイアンだった。

「…モニターさん、あれは？なんなのさ？」

『あれは「シェイド名：ミニマムアイアンガードイアン」ですね。』
いきなりロックガードイアンの変種、それも鉱石らしいものを見つ

けられてなんか嬉しい。

「メタルメタルしい体してるねえ〜」

『「メタル」という単語は和訳で「金属」ですよ?』

「いや…なんと言うか我々日本人は鉄でも金属でもそう言う名前や体している生物を見つけるとテンション上がる性質があるんだよ…」
『なるほど。ニュジオ様の元の種族は変人だらけなのでですね。』

今の僕の発言でモニターさんからの日本人全体の評価が下がってしまったかもしれない…。

「とにかく戦ってみるか…ちよつと配信のタイトルとかいじるからモニターさん様子見といてー。」

『私は便利屋ではないのですが…』

って言いながらちやんと様子を見てくれているのでエディットコメントロールで配信のサムネイル写真やタイトルを作っておく。写真は自分の記憶から取り出したメタルス●イムの写真にしとく。タイトルも、メタルスラ●ムに似てるようなのを見つけた!、としておく。

これで上手く視聴者さんと呼べるかな…?

さて、戦ってみるとしよう!

《これが修行（壺おじ）で得た力！》前編

「はい、みんなくこんジオく！ってさっきまで配信してたんですけどね〜」

軽く笑いながら配信を始める。

「てことで音量大丈夫？…あ、大丈夫ね。って事で今回は下山してる途中でレアなシェイド見つけたんでちよつと討伐して見ようと思えます！」

と、いうことで今見張つててくれているモニターさん！あのシェイドについて皆さんに解説お願いします〜！」

『（私は便利屋ではないと言ったのに…）はい、解説のモニターです。』

…そうですね、いつもニュジオ様の近くに居るモニター、はい、あつてます。

と、言う事でアレは地下から地上に掘り上がって来て守護地を護るシェイド、「ミニマムアイアンガーディアン」です。』

モニターさんもちゃんとコメント欄を見れているようだ。結構言葉を選んで話してる感じあるからシステムながら緊張してる？

『鉱物が多い場所に生息するガーディアンでありその誕生はとても興味深く…あ、いえ、まあ簡単に言えば鉱石から生まれ鉱石や山岳を護る、そう…タマゴや巣を守る親鳥みたいなものです。以上。』

うーん、なんかライバーさんの家族が特別出演したような気分だな…。いつもの雄弁さがリスナーさん達のために抑えられ気味になつててなんかおもしろい。あ、そろそろこっちの番だな。

「というわけで新しいライブウォッチ試しますか！いざ開戦！」

相手の近くに立ち甲斐田晴^{かいはる}ライブウォッチをセットし全方位360度回転。そして…

「はろはろ〜！にじさんじ所属バーチャルライバーNewジオウです！よろしく〜！」

成功！これが僕の新しい力…甲斐田って「魔」の研究者だから魔法とか使えるのかな？

『臨時スキルを追加しました。』

スキルシステムさんから通達来たけど何が追加されたのかな…？

「まずはこれ！」「法器：研究本」召喚！」

1冊の本が召喚される。…これは甲斐田がいつも持つてる本と同じデザインだな…。なんて思っていると突如相手が突進してくる。

「うおっとー回避できたー！じゃあこの研究本で…あれ？ん、おい、なんかでてこい！」

何度も念じるが魔法らしきものは出てこない。

『…それはどうやら相手の魔力を測定したりする言わば便利アイテムみたいですね。』

「え？」

確かに相手に向かって念じたことで相手の魔力の流れとかが図や文字で浮かんできたのでわかる。いやいやそんなの読んでも今は意味無いって！

「甲斐田の力ってこれだけ!?いや！もう一個武器があった気がする！今度はこれだ！」

「魔法武器：オブスタクルギター」召喚！」

《これが修行（壺おじ）で得た力！》後編

「魔法武器：オブスタクルギター」召喚！」

うおっ！これがギターか、初めて持った…。不思議な形だし意外とデカいな、これ。さてと、1回弾いてみますか！

「みんな、良く聴いとけよ！」

弦を抑える指が勝手に動く。そこから流れてくるのはキレイな優しい音。それを聞いていたミニマムアイアンガーディアン、もといミニマム鉄守護の動きがゆっくりしてきた。弾きながらモニターさんに聞いてみる

（モニターさん、これはどういう仕組み？）

『そのエレクトリックアコースティックギターには…』

（長いからエレアコでいいよ）

『そのエレアコには精神を鎮める音の力があるそうです。』

（これも攻撃じゃないのか…）

『観察したところそのギターには3つのモードがある様ですが？そのボタンを…』

モニターさんが不思議な指で指してくる所を見ると3つのボタンがあった。

（じゃあ押してみるか！）

押した瞬間別のギターに変わった。今度はエレキギターみたいだ。

「よしーもう1曲行くぞー！」

アンプもないのにちゃんと音が鳴るなあ…と、思いながら相手の様子を見てみると今度は後退りしている。もう1回モニターさんに聞いてみる。

（これはどういう仕組み？）

『相手の魔力や精神に乱れを生じさせてるようですね。この武器の名前の通りの効果ですね。』

（え？このオブスタクルって言う単語？意味はなんなのさ？）

『《邪魔》ですね。』

（あー、うん、なるほど。）

カツコイイ単語だと思つてたけど意味知つた途端少し冷めたな…。
「じゃあ最後のモード変形だッ！」

ボタンを押した瞬間エレキギターの形から、エレキギター似の斧の形に変わる。なんかシェイクで手に入った武器つて今の所ゴツイ武器しかないのな…。

まあ斧つて言つたらこれをやるしかないな…首をコキツと鳴らしながらセリフを言う。

「俺の強さにお前が泣いた！」

『相手はガーディアンなので泣きませんよ？』

「あ。ああ、これは仮面ライダー電王のキンタロスつてのが言うセリフで…つて、のわっ！」

お邪魔効果が無くなって元のように動ける様になったミニマム鉄守護が襲ってくる。だがしかし！「スキル：遠心力の勘」で長柄武器を使いやすくなったワシをなめるのではない！

斧でガードした体勢から流れるように回転して斜め横から一撃を喰らわせる。相手に攻撃が当たるとエレキギターの音が鳴り相手の動きも鈍る。お邪魔効果は斧の斬撃にもあるのか。

「よっしゃーアンコール行くぞー！」

突進されたらカウンターで切りつける。それを繰り返していた時、相手が大きくふらついた瞬間を見極め、ここぞという様にジャンプして股を広げる、そして相手に強烈な縦斬りを喰らわせ相手を砕く。そして戦闘が終わつたのを確認して一言セリフを言う。

「ダイナミックチョップ…」

『後から言うんですね…』

《山岳からの帰宅》

「ふう、ダイナミックチョップ再現ってすごいやるのに体力いるなこれ…カットを入れなきや普通できないよ…」

と愚痴を言いつつコメント返信する。

みんなからは新しいシェイク見れて良かった。だとか、月ノ美兎シェイクだったら簡単だったのでは？だとか、甲斐田かいただみたいな格好でダイナミックチョップは意外とイイぞ。とか、たくさんの評価を頂いた。

「と、言う事でここで配信切ろうかな、帰って寝支度しないと。」

おやすみと言って配信をOFFにする。さて帰るか、いやまだとある作業が待っている。なんなのかと言うとそれはミニマムアイアンガーディアンの死体？まあ鉄の塊数個とビーズほどの大きさのガーディアン核石だ。

手をかざして見たところ情報は「鉄塊（小）」と「ガーディアン核石（極微小）」らしい。鉄塊はなにかに使えるかもしれないし核石も後で使うだろうから全部インベントリに入れる。

さて今度こそ帰ろう。このまま甲斐田晴シェイクで帰った方が体力も持つだろう。女子高生の体じゃなくて成人男性の体だしね。

く帰宅（？）後く

ああ…疲れた。そうだった…今更思い出したけど甲斐田って屋敷に引きこもって作業してんだった…。体がガクガクだぜ…。とりあえず、変身解除と傷の確認をして寝ようかな…。しかしいつまでたってもこここの焦げ臭さは慣れないな…おやすみ…

「よし！今日から家を作るぞ!!」

そろそろちゃんとした場所で休息を取りたいい〜！

『今日のご予定はそちらですか？』

「うん、甲斐田晴シェイクのおかげで斧が手に入ったからね！」

『…体力は大丈夫なのですか？』

「それに関しては僕のスキルには「根性」があるからね！山下りのよう

な不規則な道を行く作業よりも、同じ作業をやり続ける地道な木こり作業の方が根性使うからね！」

『確かにそうですね…』

でも無理すんなよ、的な感じを漂わせるモニターさん。

「まあそんなに心配しないでよ、だいじよぶだからさ…。つてな訳でちよつと近くの森林地帯に行くか！」

さてと、ライブバーキック配信をしてた森林に着いた訳だが。とりあえず配信しよう、木こり配信だ！木こりなんて主にどう●つの森でしかしたことないけどうまくいくのだろうか？あ、配信始まってたわ。とりあえず挨拶！

「どもども！新世界に降り立った聖なる仮面ライダー！Newジオウです！というわけで早速…」

いつもやってる変身ポーズを取り、早速変身してからさらに甲斐田晴ライブウオッチでシェイカータイム！

回る～！

「はろはる！」

ふう、朝イチから回転はやっぱキツイな…。まあそんなことはいいとして「魔法武器：オブスタクルギター」召喚！

召喚してちよつとだけエレキギターモードでギューンと音を鳴らす。

「よっしや高まる！そしたらアックスモード！」

エレキギターから斧に変形したところで木に向かい振りかぶり切りつけると…なんと振動し始めた。少しづつ木が切れていつてる。

「うおお凄い細かい振動だなこれ！…振動？あ、それなら…」

エディットコントロールで「エコー」を使う。

すると木はさらに早く切れていく。

なんかいける気がする！

聖者の建築編

《ニユジオ不動産 木を切る》

ジュイーーーーーン…

「ーそれでねー、やっぱこの世界から出られたら何したいかって言うとー」

ジュイーーーーーン…

「ーやっぱり親の作った料理とか食べたいねえ、まあメンチカツとか…お店とかではカレーパンとか…あ、枝切るねえー」

ズツ…ズツ…ズツ…

「ーあとはインベントリに入れて…と、それならみんなのオススメ料理ってある?ー」

絶賛木こり配信中。切断してる時の音をリスナーのみんなに聞こえないようにできるだけエディットしながら雑談を楽しむ。朝からの作業はきつかったけれども時間が経つとコツも掴めるし何よりみんなから応援されてるから頑張れる。夕方までやってるからはつきり言ってる腕の筋肉がつりそうだ。ここまでやれたのはやっぱリスキル「根性」のおかげかな?それにこの魔法武器のおかげなのは間違いない。

あ、そろそろ夜っぽいかなあ?

「夜になりそうだから次の話題で終わりにするよー、んーそれじゃあねー…」

「いやー!疲れたわー。もうこれ明日になったら筋肉痛確定だなあ絶対。」

『お疲れ様です。あまり気にならないと思いますがお身体の傷の確認と手当てを推奨します。切り傷がかなり有ります。』

「んー、確かに多いな…こんなに薬草使うんならあの時もつと取って来た方が良かったなあ」

薬草で作った傷薬を塗りながら昔の出来事に後悔する。こんなに

使っちゃうならいっその事インベントリに残してある最後の1本の傷口回復ポーション使っちゃおうかな…？

いやいやこれは結構高価なものかもしれないからとっておこうって決めたじゃないか！

…でもいくらたつてもお金使う機会は無いらしいし、スーパーチャットとかでどんどんお金は増えてく…。お金って使い道ないのかな…？

こういう時は…

『…なぜ、こちらを見ているのですか？』

「あ、気づいた？あの子、お金について聞きたいんだけど…」

『金銭については私はあまり知りません。』

唯一知ってそうなのに知らないのかよ…

『ですが、金銭に詳しい方なら知っています。』

まじですか。

『システム同士と言うだけの仲ですが…《マネーシステム》という方です。』

「え？そんなのいんの？いつから？」

『ニュジオ様の補助に着任する前から存在は確認してました。』

「は!?!って事は最初からいたの？そんなヤツ？」

「ってか教えてくれよおそんなんだつたらさく…」

『マニユアルにはニュジオ様から金銭について聞かれた時に紹介する、と言う流れでしたので。』

「マジかよ…あ、今からソレ使えるの？」

『お呼びします。』

こうして《マネーシステム》とやらに会う事になった。システムと会うのはモニターさんを除いて初めてかもしれない。

…ちゃんと空気が読めるヤツだろうか??

《ニユジオ不動産 取引相手に出会う》

『連絡したので1分後には使える様になるかと。』

「システム同士なのに結構アナログなんだなー」

『マネーシステム側からこのような紹介をして欲しいと通達が入ったので。』

「…変わったヤツなんだな。」

『通達文からしても彼の思考は理解不能です。…来たようですね。』

モニターさんでも理解不能なヤツなのか、と言おうとした時、それは突如現れた。ゴージャス感あふれるフレームに金色の画面をしているモニター。ナニコレ明らかに怪しすぎるんですケド。

『FフOOウWワAア—HハHハAアHハHハAア!HELLO!Newジオウ!そして我々がキョウウダーイ!HハAア—HハHハAアHハHハAア!』

なんだコイツ?横文字ばつかな…そして五月蠅い。

『おや?おやおやおや?ンン♪Cコoオnンgグrラaラtチuチュlレイaイtシiシoンn我がキョウダイ!まさかボクの見てなかったうちにバクジョンアップしてたなんて!』

美しい手だねえ!まさか声も出せたりするのかい?』

『まあ…一応出せますが。』

『Oh:Yeah!なんて美しい声なんだい!?その声でボクのために1曲歌ってくれないかな?』

『…私に歌を歌う機能はありません。』

『ンンフフフフ、まあ、まだ気づいて無いみたいだね…。』

まゝあ、それはともかくNewジオウ…あ、いや!君はスターだからね…配信通りニユジオ、と呼んだ方がいいのかい?HハAアHハAアHハAア!』

「…まあ…どっちでもいいけど…?」

なんだこのオッサン、と思わず怒ったような口調で言ってしまった。

『NONNONNON!わっ、わくるかったよ!さつき君の、いや、君の為だけの補助システムに失礼な事を言ってしまったのは謝るよ!君

とはいい関係で商売したいんだよ！ね？いいカナ？ニュジオ君？』

いやモニターさんの話じゃなくてあまりの胡散臭さに対して少し怪しんでしまったただけなんだけど？意外とデカい口たたいて話してるのに根はビビりなのか…？

「あ、いやごめん、少し怖い顔しちゃった？別に怒ってないよ？」

マネーシステムの様にハハハと笑いながら言う。

『そ、そうかい？じゃあボクのできる事を話すよ？大事だから聴き逃しは御免だよ？』

「アンタのモニター部分にも文字は写るからそりや大丈夫だろ？」

『H A H A H A！一本取られちゃったね！じゃあ…ん、何から話そうかな？それじゃあー』

Newジオウとマネーシステムが話している時、補助システムはあることを思考していた。なぜマネーシステムは自分と同じような存在なのに自分とは全く違うのか。そしてNewジオウに対して湧いた自分にとって感じたことの無い小さい暖かみはなんなのか。

補助システムは絶えず思考を続ける――

《ニユジオ不動産 取引内容を知る》

『それじゃあ、まず最初はなんと言ってもこれこそメイン!!ン、Th e ショッピング!!』

「ほう、買い物か。ちよつと何売ってるか見せてくれよ。」

『ノンノン!まず人は人の話を聞きなっさくい!』

ショッピングの方法はなんと二つありまーす!と、言うのもまずコレ!ネットショッピング!…に介入して作ったもので…名前は…デイメンショッピング!』

「おお…って介入!?大丈夫なのか?僕の元の世界のネットショッピングに何かしら変な事してないだろうね!」

『そこはご安心を、ミスターニユジオ!名前の通りこれは《次元の買い物》。ボクの権限でちよこつとだけ次元を歪ませてコピーしてるんだよ。ちなみに、これひとつだけやるのにフツの人間じゃ出来ないほどのプログラムだよ!』

「まあ…そうだろうね。まあコピーなんて僕もできないしね。」

『いやいや!ちゃんと自信を持って!ニユジオ君だって強くなればそれくらいお茶の子サイサイじゃないの?』

「そんなもんかなあ?」

『いつかは出来るのを楽しみにしてるよ!H A H A H A!つと、話題が逸れたね。まあこれは安心安全の普通のネットショッピングだよ!…って言ってもほとんどが配送料だけどネ!!』

「…ふーん、それでもう1つのは…?」

『マネーシステムプレミアムショッピング!通称MSPS!どこぞの有名実況グループと名前似てるけど間違えないでほしいね!!』

「…?で、内容はなんなのよ?」

『こっちはお客様の欲しいものを作ってそれを翌日に届ける!言わばボク限定ショッピング的な?売ってるものはこっちの世界のモノだったりデータだったり…こっちはお値段もオサイフに優しい!こっちはそつちからモノを売ってくれても構わないよ!あ、あとボクのプロデュースした商品もあるから見えていつてね!』

そんなものまであるとは…

『あとは貯金機能かな？盗むことが得意なシェイドは何をしてくるのか分からないからね！あ・と、ここは利子がほぼゼロに近い日本とは違うから貯めれば貯めるほど金額も増えてくよ〜！』

『そして次はお金を借りることが出来ちゃうよ！買いたいのにあと少しお金が足りない…なんてこと、イヤだよねえ？さすがに限度額はあるけどある程度なら自由に借りれるよ！借りたお金は配信とかで得たお金を少しづつ頂いて返済してく形だね！コワイお兄さんに言い寄られる心配は無いから安心ネ！』

「でも借金はしたくないな…」

『で、これが最後！投資機能！投資するほどジャンジャンいいことが!?…って言うけどこれは製作者が作ったプログラムだからボクには何がなんだか…でも、ボクの機能として付いてるからには必ずいいモノだって事はマネーシステムの名に誓って言わせてもらうよ！お金は信頼と助け合い！これがボクのモットーさ！H A H A H A！』

ふーん…

って事はまとめると4つの機能があつて、「売買」「貯金」「借金」「投資」か…まさにThe・マネーだな…

『じゃあニュジオ君！イキナリだけど何か使いたい機能はあるかい？』

「もちろんあるよ。」

さて、取引開始だ！

《ニユジ才不動産 取引をする 前編》

「僕が取引したいのは…そうだな、建築について学べる物が欲しいんだけど…ある？」

まずは在庫があるかどうか確かめてみよう。

『そりゃたーくさんあるよ！エート…「在庫検索・建築関連」…本とかもあるし、なんなら作業道具、資材も豊富だよ！』

「ちよつと見せて」と言つて確かめる。確かに沢山ある。あれ？外国の本もある？けどこれって…

「こういうのって試し読みできるの？」

『目次とかそういう内容のないページは省くから10ページならいいよ！』

「意外と親切だな…おつ？これって英語の本でも翻訳されてる？商品画像で何となく気づいたけどマジなのか…」

『これもサービスの1つだよ！ボクくらいになるともう、色んな言語が分かるからね！万国の言葉なんてカンタンカンタン！』

んじゃあそのアメリカかぶれみたいなのはなんなんだ…？

「木造で、えーと、あれは…あーうん。丸太小屋？つて言うのかな？その書籍は？」

『わかったわかった…「種類：丸太小屋」追加…でたよ！』

（検索楽だな…）沢山あるね…選べないな…オススメは？」

『ウーン…ボク的にオススメ出来るのは…これかな？「ジョン エレナス著 基礎から応用まで 自作ログハウスのロマン」かな？』

「なかなかいいタイトルだね。試し読み…ふーん…」

『どうかなどうか？』「いいかも！で、お値段は？」

『これは豪華版だから二万三千円で…』

「まあまあするな…でも所持金はまだ三十万近くあるからね！じゃあ買いま…」

『ん？イヤイヤ待つて待つて？まだ色々測ってるから。』

この時僕の頭には、「こっちのスパチャつてYouTube介さないからめっちゃお金貯まるな」としか考えてなかった。だがそこで

僕に1つの事件が起こる。

『OK！本体価格二万三千と送料が百六十万だからサービスで三千引いて百六十二万だn「いやいやいや、ちよつと待ったー！」「え?」「なんでそんなに送料高いのさ!?え!?ぼったくり?え!?おかしいでしよ!』」

『マーマー、落ち着いて!なんで送料がこの値段分かるかい?ミスターニユジオ!』

《送料》ってのはここまで運ぶための値段だよ!ここは君が元々いた世界で言う地域から地域へ送ってる訳じゃ無いんだよ?

1つの世界からコピーして!さらに次元を超えて!こつちの世界へ送っているんだよ?

ボクはコピーは簡単だ、とは言ったけど次元の歪みを使うってのは簡単にできるけど高リスクなんだよ。そのリスク分が《送料》ってモノなのさ...。』

「脳が理解出来ないよ...なら、例えるとしたら?」

『ん、た・と・え・ば...とある話にある《5億年ボタン》って知ってる?ボタンがあつて、押せば百万円貰えるけど代わりになくんにもない空間で5億年間過ごさなきやいけなくて、しかも出れたら5億年の記憶を消されるってハナシ。』

「聞いたことあるけど...と、言うことは...」

『:ボタンを押すのは簡単だし、何度も出来ちゃうけど、隠れたりリスクはやバいつてワケ!』

「確かに似てるけど、話のチョイス...」

『H A H A H A !色んな話の中でもユーモアあるでしょ!』

「まあそうだけど...これじゃお金が足りない...」

『A h ~。でもいい方法なら有るよ!』

「まさか...借金!?!」

『ノンノン!ダイジョブだよ!こういうトキこそ!我らの~!』

『M・S・P・S~!』

《ニュジオ不動産 取引をする 後編》

「MSPS…？なんか言ってたね…：アンタのプロデュースしたのが何たらかんたらって…」

『oh！ニュジオ君！そこを覚えててくれたのは嬉しいけど内容を覚えてくれたら満点だったのにく！』

いや、送料の話で記憶ぶっ飛んだわ。

『正式名称は、マネーシステムプレミアムショッピング！ん、さつきも説明したけど今度は掘り下げて、注目ポイントを説明するよ！』
「よろしく頼む。」

『ここではこの世界のモノやデータを売っているんだよ。で、君にとつてもいい値段で販売されてるものが多いかもね。理由は次元の歪みを全然使わないからなんだ！』

元の世界で作ったモノじゃなくて、こっちで作ったモノだから莫大なお金、つまり《送料》が全くかからないってワケ！あつても数百円程度だからサービスで帳消しにするよ！』

「送料がない…か。」

『しかもこれはお客様の欲しいものなら、この世界のモノやデータ限定で翌日までに作ってお届けするよ！』

「じゃあこの世界には建築の本は有るってこと？」

『H A H A H A！違う違う！ボクが言いたいのは「データ」についてさ！』

データ…？

『「インストール」って、知ってるかい？』

「あ、あく！僕が薬剤について色々してた時、薬剤についてちよこつと知れたやつとモニターさんが僕の思考を読まないように機能を追加したやつか！」

『おっと!!知ってたみたいだね！さすがニュジオ君だ！』

知ってる通り、あれは知識を自分に追加する時に使う御業だよ！』

つまりデータ…知識を貰える!』

『ようやく分かったようだね！顔にそう書いてあるよ！』

「買わせて下さい!!」

『いや…どうしたの急に敬語になっちゃって…でも高度なデータは高いからね。買える程度のデータにしようネ!』

「これまでの会話で欲しいもの、持っているお金はもう知ってるから調整しようか!じゃあ機能を整理して見積もろうかな?じゃあ—」

その後30分程かけて欲しいデータと代金を見積もって、代金を払った。なんとなくマネーシステムと話して分かったが、コイツはちよつとふざけてる時もあるけど、意外とお金や商売に対しては真面目なヤツって事が分かった。まあ強いて言うなら少し通常のテンションは下げて欲しいが…。

『と、言うことでボク達システムで明日までには作ってくるよ!』

see you again Tomorrow!

「よろしく頼むよ!」

『ビュン』、と音がなりマネーシステムは消えていった。夜はかなり深けている。

「ふう、おまたせモニターさん!終わったよ!」

『…終わりましたか。もう遅い時間です、睡眠を摂る事を推奨します。』

「そーだね、うーん疲れたあ。さっさと寝るかね。」

「寝袋を用意して寝る準備をして明日に備えて睡眠を摂る。明日が楽しみだ。」

『…私は、システム…。私は、補助システム…。』

『…でも、私は一体何…?』

《ニユジ才不動産 知恵を得る》

「いや〜ここが良いかな〜、あっちも良かったんだけどなあ…」

今日は朝からヘビーな作業はやめておいて、今は土地探しをしている。平原である程度平らな土地を探すのは簡単だけど、見つける土地から見える景色はどこも同じ。何も無いからね。

でもって今、自分が重んじているのは、如何に色んな地域に赴きやすいか。と、なっている。

「やっぱりここかなあ…?」

近くに池が有り、ここはなかなかいい場所だ。一応ここにしよう。

「モニターさん。一応忘れないうちにここマッピング機能で印立てていて。」

『分かりました。…他にしたい事はございませんか?』

ん? いつもと違って気が利くな…

「んー、それじゃあ、少し寝たいな…マナーシステムが来そうになつたら起こしてくれるかな?…あのテンションの声で起こされたくないし…」

『起こし方はどのようにしますか?』

「アラームじゃなくて揺さぶりで。」

『分かりました。』

実はいつも寝すぎてる自分を起こしてくれる時、いつもアラームで起こしてくれるんだけど、音量が大き過ぎて心臓に悪いんだよね…。さて、寝袋…寝袋…

ここに家が建つのが楽しみだなあ…寝よつと。

ユサユサ…

「んー…」

ユサユサユサ…

「あと少し…Zzzz」

ユサ…ユサユサユサユサユサユサユサ…!!

「わ、分かったから! 起きた! 起きました!」

『起きましたか。』

「お、起きました!」

「ふあああ…ねm『F O O W A H H A H H A! G o o d m o r n i n g、ニュジオ君!』…いや、この声で完全に目覚めたわ。」

『商品をお持ちしたよ!じゃあインストールの準備は出来たかな!?』

「あいよ。」

『そうかい!それじゃあイツツ インストオ〜ル!』

『マネーシステムからデータが届きました。「建築の学びパック」のインストールを始めます。』

おおお…これこれ、この落ちてきた雫が頭に浸透する感じ…ちよつと前回よりも雫が大きいような?

『大丈夫だったカナ? 脳が耐えきれない量の情報量だと頭痛がする場合もあるらしいけど…:ニュジオ君ならダイジョブそうだね!』

「まあ大丈夫だけど…これでホントに家作れんの?」

『そこはご安心を!じゃあまた用があったらステータスから呼べるからね!じゃあ〜』

「ちよつと待ちなよ。」

『何かあったかい?』

「アンタさ…《製作者》についてどこまで知ってるの?」

『それは…』

僕は少しマネーシステムに歩み寄る。

「購入サービスとして教えてくれないかな?」

まあ…そうだな、これからも良い商売相手にしたいし…《お金は信頼と助け合い》、なんですよ?」

『ハ…ハハハ…君はいつかすごい大物になりそうだね…まあボクが言った言葉だしネ。怒られないくらいなら話せるよ。』

「じゃあ聞かせてもらおうかな?」

《マネーシステム》

ボクが記録してあるボクの始まり。

始まりはまさに虚無だったよ。ボクには目なんて無いから目を閉じてたわけじゃない。

気づいたら、いや、今思うと気づきなんて無かったかもネ。

ただボクはそこにいたんだ。何も無い空間で、音も無く、光も無く、ただただ僕はそんな所にいた。

当時は自分の名前しか分からなかったよ。でもそんな時、ボクに話かけてくる存在がいたんだ。そのヒトが多分ボクの製作者なんだろうね。その時のボクは少し考える事はできても、何も喋れないし、何も表現出来ない状況だったよ。

そんなボクにイロイロな事、そうだね…例えばボクの役目とかかな？そんなコトを教えてくれた。今思うと、その声は寂しいって言うカンジがしたかな。

それからはずっと色んな書物やらのデータや記録を読み漁る作業だったな。最初は色んな国の言葉かな？それから色んな数学のコトとかね。幸いボクはその記録を1つも忘れなかったよ。…まあ、システムだからなんだろうけどね、H A H A H A…。

色々覚えてきた時に渡されたのが…渡されたって言うのカナ？入られた…って表現でもいいかもネ。とにかくそれが『モニター』だったよ。黄色くて、地味なモノだったけど嬉しかったね。

そこからは自分の意志の表現…つまり文を出せるようになったんだ。これまで記録してきた言葉を繋げて1つの文に出来るのはとても面白かったよ。

それからまた、色々な記録を読んでたら、突然声が聞こえたよ。ボクが最初に聞いた声と同じ声。で、今度はアップデートしてくれるって言うてくれたんだ！アップデート…当然意味は知ってたからとても嬉しかったよ。スリープモードに移行してアップデートして貰ったんだ。

その時に貰ったのがこのボクの声と少し装飾されたこのフレーム。
…その時からだったかな、僕が商売について自分から学びたいと思っ
たのは。

それからは学んではアップデートの繰り返し。商売人としての機能も追加されたし、他のシステムと文通が出来るようになったり、実際に喋れたり。で、気づいたらくくんなに豪華な見た目になってたつてワケ。

これがボクの始まりの話。

『…って言うワケさ！』

「なるほど…って！ちがあう！僕が聞きたかったのは製作者の話だよ！アンタの自分語りじゃん！」

『ウンウン、言いたいことはわかるよ。でもこれがボクに関する製作者の話カナ。ん、なら補助システムにも聞いてみてよ！』

「それしか無いんだね…モニターさん、これ本当？」

『わかりません。』

え？

『…記憶が無いのです。私には。』

「記憶が無い…？」

『マ、そんなコトだと思っただけだね！補助システムが記憶が無いのは何となく感じてたよ。』

—だってシステムにしては未熟すぎるからネ！』

『…』

「そんなに言う必要無いんじゃないか！僕だっていつも助かってる！それに—」

『大丈夫です。マネーシステム、話は終わりですか？私はこの事について自分でも考えています。だから今は…』

『…ゴメンねキョウダイ。こつちも同じシステムとしてお互い知っておきたかっただけなんだ。…もう帰るからサ。(ミスターニユジオ？聞こえるかい？—)』

「…！」

…じゃあ…次もよろしく。」

『分かったよ、理解してくれてありがとうニュジオ君！それではマタネー！』

そう言つてマネーシステムは消えていった。

「モニターさん、今から僕は家作るから少し休みな。

…それと、いつもありがと。」

『はい…分かりました。』

『(ミスターニユジオ…これは補助システムには聞こえてない信号だけから言うケドね…あのコ最近自我がはつきりしてきたんじゃないの?)』

(確かに…そうかも。)

『(それはイツ?)』

いつ…?…えーと、たしか…

(…あつ！アップデートの後…)

『(つまりあのコはまだ生まれたてなんだよ…)(…なるほどね…)(

なるほどね…)

『(コッチから言うのもジブンカッテだけどあのコの事ヨロシクね…

！)』

(オーケー。)

《ニユジオ不動産 家を建てる》

よし、とにかく家を建てなくちゃな…、まずは設計図を書き始める事から始めるんだろうけど、今の僕にはそんなの必要ない。さすが建築データパック、サバイバルゲームみたいな感じでどの場所にどんな物を置くのかうつすら見える様になってる！

何故かと言うと

設計図を作る為には紙とか筆類が必要な訳である。当然そんなものはここには無いし、デイメンションピングで買ったとしても送料がとんでもない額になる。と、言うことで僕が買ったデータには《本来書かなくちゃならない物が書かなくとも見える。》と、言ったまさにプレミアムなデータを買わせて頂いた。…値段もプレミアムだったけどね。

更に今回の家は木材以外使えないので釘を使わない日本式の構成の家を作ることにしてる。幸いにも電動ノコギリのような使い方ができる魔法の斧「オブスタクルギター」があるし、ハンマーの代わりとして使える杵の「ツキノキネ」があるから何とか道具に関しては安心だ。…めっちゃ作り辛いけどね。

途中、木が足りなくなつたので木を切りに行ったらシェイドがいて驚いた。相手は群れたボアトードだったので今の僕には余裕すぎる戦いだつた。

全員ツキノキネで気絶させて捕獲。美味しそうなお肉を頂きました。家が出来たら食べようかな…？それでも食べきれないくらいあるな…。

—何とか苦難苦節を乗り越えて6日で立派な1階建てのログハウスが作れた。でも内装は無いんだけどね？

ここまで来れたのはかなり嬉しい。僕とモニターさんの個別の部屋も作ったのだがモニターさん言わく『私には勿体無い』、との事。

ベットもまだ作れない為、寝袋で寝るしか無いのだが、寝袋は寝袋で超寝やすいのでベット要らないんじゃないか疑惑がある…けど、久

しぶりにベットでも寝たいので頑張つて素材集めをしなくては、後は作る為のデータ…、でももうお金が無い…。

「と、言うことでね、1週間くらいたったけど無事家が出来ました！自分で言うのもあれだけど、まじで頑張りましたわ！」

家の完成記念の配信もいい感じに撮れてて嬉しい。

「なので！今回が初お家配信なんだよね、これは進化と言えるよね！

家の明かりもボアトードの脂で作ったロウソクだし、結構いい雰囲気気だわ。

拠点も出来たし次は何処に行こうかな。…と、言うことで配信終わりますかね。じゃあおつジオ〜！」

どうだった？山登りや家を建てるって事に興味は出たかい？

え？その家はまだあるのかって？

…大丈夫。ちゃんと敷地内に記念館として残してあるからいつでも行けるよ。

うーん、またその家で寝たい気もするな。懐かしい…三人でまたゆっくりしに行きたくなるなあ…。

おや、失敬、少し先の話をしてしまったかな？まあそろそろソイツも出てくるだろうし、俺の記憶がもつと賑やかになるはず。

気になってきたかい？じゃあこれが続きの記憶だよ。

…俺は街に行つてくるかな…何を食べに行こうか…ブツブツ…

聖者の同類編

《雪原探検！》

「うお、さ、寒う…」

はい、今回の遠出先は雪原地帯です。この地帯に来て30秒であまりの寒さに後悔しました。

「モニターさん…この防具ぜんぜん寒さやらないんだけど…」

『ご安心ください。何れにしても長時間滞在によってスキルで耐性が得られるはずです。』

「んなあ!?!ボアトードの毛皮の装備作ったら大丈夫って言ったじゃないかあ…」

『…いや、あまりにもニュジオ様に裁縫のセンスが無かったのは想定外でした。』

支えないと防具が外れるこの状況。まじやばい。

「言わなかったけどやっぱモニターさんが作ってくれたら良かったんじゃない?！」

『何を言うんですかニュジオ様…私の腕は1本しかありませんよ?流石に作れません。』

そう言つてモニターさんは画面の下の空間から出てきた腕を横に振る。その腕つて寒く無いんだろうか。

「その腕寒く無いの?」

歩きながら聞いてみる

『いえ、実物の腕と間違われるかも知れませんが一応中身は球体関節ですよ。』

「えっ、そんなにキレイなのに本物じゃないの!?!」

『…機械に本物の腕が付いたら流石に嫌ですよね?』

「うーん、まあ確かにそうかもしれないけど…」

でも、モニターさんってある意味機械って言う概念超えてるからなあ…、と思いながらモニターさんと話し合い、寒さを忘れようとする。

「…でさ、流石にこんな所にライブウオッチなんてあるのかなあ？」

何しに寒い雪原まで遠出をしに来たかと言うと、この世界のオーパーツ的なアイテムである、ライブウオッチを探しに来たからだ。

『今手元にあるライブウオッチはニュジオ様のウオッチも含めて3つ。』

ニュジオ様のウオッチと他の2つのウオッチは変身用と強化用で明らかに違う内部構造とエネルギーですが、他の2つである、月ノ美兔ウオッチと甲斐田晴ウオッチ同士の内部構造とエネルギーは似ています。

それにより、ニュジオ様のウオッチと他の2つのウオッチと似ているものがないかサーチをかけたところ、この雪原に反応がありました。』

「なるほどね…で、ここにはどっちがあったの？」

『それなんですが実は―「まって」』

(何かいるぞ…)

『(私の熱源探知では察知出来ませんでした)』

(え、てことは…オバk「ダレだ!?!」!?)

「言葉を喋った…?」

「そこにいるのか!」

僕は自分には危険が無いことを分かって貰うため両手を上げ岩陰から出る。その途端、急いでいたため防寒具が全部スルスルと取れる。

こうして雪原で2人―

いや、雪原で高技術のパンツ一張の男と全身高技術のサイバースーツのイケメンの2人が出会った。

《出会う2人 前編》

やべ、防寒具全部脱げた。まあここは一言目が大事だよな…

「…怪しい者ではありません!!」

「いやどうみてもフシンシヤだろ!!」

「…いや、これは何も武器とか無いって言う表現で…」

「フム…なるほど。だが、怪しいのには変わりない。オレの拠点にこい。」

「(何とか通じた…?) わ、分かった…」

「あと、途中で取れた服も持ってきな。」

「あ、バレてた?」

「バレバレだ。」

あれから数分後、ちよつと狭い穴蔵に着いた。どうやらここが彼の言う拠点らしい。

「ココで人と会うのは初めてだ」

いや君、頭に三本ツノ生えてるけど人なの?、という言葉はしまつて置いて…

「…いや、僕もだけど。」

「…オイ、その防寒具貸せ。」

「え…あ、うん。」

「…針代わりになるものと糸代わりになるもの持つてつか?」

あ、直してくれんのね。ありがてえ。

「一応、骨で作った針と繊維の糸なら。」

「縫もんには自信がある。あと、縫ってる間、オレの質問に答えて貰う。」

「なるほど…分かった。話せる事なら話すよ。」

「じゃあまず…オマエ何処のヤツだ?」

いや何処の中学校か聞くヤンキーみたいに聞かれても…

「草原地帯から来た。」

「いや、それもそうだがオマエはどういう世界から来た?」

「…地球の日本、東京だよ。」

「おお、オレと同じ世界で同じ国か…俺は北海道だ。」

「え？外人さんじゃないの？金髪だし。」

「バカ。親がヨーロッパ人なだけだ。コレのせいでオレのコト見たヤツ、勝手にヤンキーとか思うヤツ多いんだよ、マジで。」

いやそれ言動にも関係あるだろ絶対。

「あとその物陰から見えてくる黄緑のモニターはなんだ？」

隠してたのバレたかー。

「(バレたみたいだしモニターさん来ていいよ)」

あ、彼？…いや、彼女？はモニターさん。本名は補助システムって言う僕の事を助けてくれるシステムの方で…」

「システムってなんだ？」

「え？知らない？んじや、わかる事なら教えるよ。まずー」
かくかくしかじか

「なるほど、スキルくれたりモノくれたりしてくれんのがシステムなのか。」

「…うちのモニターさんみたいに教えてくれる存在はいなかったの？」

「いや、一応この世界に来た時、案内の本を貰ったんだが…」

なんか難しい顔してるな

「実は…オレって本が苦手だな…漢字も全然読めねえ」

「なるほど本苦手？」

「いや…ヨーロッパで生まれて北海道に引っ越して来たからあんまり日本語が苦手だな…あー、アニメとかで日本語を知った事も多い…」
「アニメ好きなのか…ってなんかフラフラしてるけど大丈夫!?ちよつと！」

「実は…うう…ぐっ」

彼はそう言い残し、いきなり倒れこんでしまった。

《出会う2人 後編》

「いやゝすまんすまん！腹が減ってしまったっていて迷惑かけたな！」
嬉しそうにボアトードの肉を食べる少年。

実は彼が倒れた時、即座に僕とモニターさんは颯爽と行動にでた。モニターさんはスキヤン機能で彼の体の様子を見たところ、かなりの空腹状態だったようだ。

そこからは僕の仕事。とにかく肉を焼く。焼きまくる。モニターさんの活躍に負けない様に上手に焼く。

で、こういう事になったってワケ。…でも腹が減るだなんて腹が減らない僕にとってはちよつと懐かしい思い出だな。聖人になってから食欲はあるけど腹は減らなくなつたし。

まあそんなことは今はいい。こつちも1個貸しが出来た。

「じゃあお肉代としてギブアンドテイクで次はこつちの話に答えて貰おうかな？」

「ああ、これが一飯の恩ってヤツか…なるほど、オレに話せる事なら。」

「じゃあ聞かせて貰うけど、君は僕と出会った時何をしてたんだ？」

「ん？狩りに決まってるだろう？」

「狩り？」

「ああ、言うのが遅れたがオレも大食らいでな、オマエも大食らいのクセによくオレに獲物をくれたな！」

「え？僕が大食らい？僕の種族は聖人で腹が減らない身体だよ？」

「聖人？オマエってオレと同じ破人じゃないのか？」

「いや、そもそもそんな3つもツノ持ってないし、どう見ても種族違うでしょ。で、破人ってなんなの？」

「…破人は一言で言うのと、とにかく戦闘に特化した存在！戦えば戦うほど強くなる…だがその代わり、とにかく腹が減る！って説明書の最初辺りに書いてた！」

「は、はあ。なんかサ●ヤ人みたいだな…」

「あと感覚も鋭いぞ！例えば！この洞の近くにいる敵の数は2体…は!?なんでいる!?!」

『!!微力ながら敵の存在を感知。敵は1…いや、2体です!』

モニターさんよりも彼の方が探知力が強い!?

「なんで気づかなかったの!？」

「肉が美味くて気づかなかった…」

ええ…アホやん…

「とにかく!これ!持ってる!？」

僕は咄嗟にジゲンドライバーとNewジオウウオッチを取り出し
見せる。

「似たようなモンだが…ある。」

そうやって彼も藍色と黒色のジゲンドライバーと藍色のライブ
ウオッチを取り出す。

『相手はかなりの強さです!』

「こつちに向かって来てるぞ…。ところでオマエ、ライバー名は？」

「…Newジオウだ。」

「ジオウを名乗るとはかなりの阿呆か？」

「うっさいうっさい!ニュジオって呼んで!そつちは?」

「シユバルツだ。」

「オーケイ、シユバルツ。洞穴から出たら配信開始と変身だよ!」

「行くか!」

「(配信開始!)」

『ジゲンドライバー!!』

『ジゲンドライバー ニュクス!!』

『Newジオウ!!』 『シユバルツ!!』

僕はいつものように変身ポーズをとる。シユバルツは武芸の様に
力強い変身ポーズをとる。

「変身!!」

僕は横に体を回転。シユバルツは縦に体を回転。

両者変身完了!

「さあ!コラボ配信開始だよ(だぜ)!!」

《凄まじき天賦》

さて、変身してみたが、シュバルツの格好を見ると仮面ライダーゲイツのツノが生えている藍色バージョンみたいな格好してるな…

あと、近くにいるだけで凄まじい危険な迫力を感じる。殺気つて言うんだらうか。頼もしい。

「オレの相手は右のヤツにする。オマエは左を抑えてろ。」

そう言われ相手を見ると、左は氷の鎧を纏った様な亀と悪魔が融合した二足歩行型シェイド、右は氷の鉤爪を装備した、熊と悪魔の融合した二足歩行型シェイドだ。

さて、どう戦おうか、相手は全身の防御力が強い。とにかく氷の鎧を壊す事に専念しよう。

アイツに左を抑えて貰っている間に右の敵を倒してしまおう。Newジオウと言ったか…アイツはまだ弱い。戦闘経験が少ないのがひと目でわかる。コイツを早々に倒し、アイツに加勢しに行くか。転がりながら相手の懐に入り込む。そして相手の脇腹に向かって拳で一撃をいれる。この攻撃で相手は一瞬怯む。その隙に一瞬、溜めをいれて胸に二撃。そこから続けて回し蹴り。1度距離を取り首に向かい膝蹴り。そこから腕に腕力を込めてアイアンクロウを浴びせ、そのまま首の骨を折る。一撃も攻撃を受けずに1人を闇に葬った。

この鎧硬すぎる！殴っても殴っても壊れん！こうなったら…

『月ノ美兎!!』

「起立！気をつけ！」「武器：ツキノキネ」 召喚！さあ、行きますよ！

砕く、砕く！砕け散る!!

「楽なもんですね！」

「オマエもシェイクするためのライブウオッチ持ってたのか。」

「え？シュバルツ!?もう終わったの？」

「後はコッチがトドメを刺す！」

『兎田ぺこら!!』

《シェイカーターイム!!》

「こんぺこー!こんぺこー!こんぺこー! シュバルツだぺこ〜! どうもどうも〜」

うわ。なんだろ、出会った時から粗野や言動ばかりとってたシュバルツが衣装とキレイな声、そして中性的なイケメン顔も相まってすごく可愛い…。これがギャップ萌えか!?

「…なんだぺこ。なんでそんな変な顔するぺこ!?!」

いや、顔赤らめてるし。てか兎田^{うさだ}ぺこらライブウオッチ!? そんなの持ってたのか…そして語尾も変わるとは…まあとにかく眼福だから…

「シュバルツ似合ってるじゃん!」

「うるせーぺこ!好きでこんなふうになった訳じゃねーぺこ! さつさと終わらせるぺこ!」 「防具: キャロケットブーツ」 装着ぺこ!」

うお! シュバルツの足に金属のブーツが出てきた! ってなんかニンジンついてね?

「行〜く〜ぞ〜ペ〜こ〜!! ファッフアッフアッフ!」

笑い声も変わるんかい。って、ん? ニンジンから音が…?

その瞬間ブーツにくっついていいるニンジンのへたから強い風が吹きシュバルツの蹴りを高速にする。

シュバルツは何度か回し蹴りをおこなった後必殺技を繰り出す。

『《ぺこつと!》 デイメンションバースト!』

高速で飛び蹴りして当たる瞬間に十何発もの蹴りを追加でいれている。

「おおりやア!! ペー!」

…なんてデタラメな強さなんだろうか。あ、ていうかさっちは…

シュバルツが蹴り飛ばしたシェイドは勢いのまま洞穴に入り、洞穴は衝撃で崩れ去った。

なんて声掛ければいいんだろうか…

《やらかした豪傑》

「やあっちまったぺこ〜！」

シユバルツは頭を抱える。凄いオーバーキルを叩き込んだな…

「ま、まあ、撮れ高は良かったんじゃないですか？」

やばい、フオローになってない。コメント欄見てみよつと。

『さすがシユバ様。』『ニユジオも頑張ったな。』『これがシユバルツの強さか！』

おお、盛り上がってる、ちよつとシユバルツをこつちに誘導するか。

「シユバルツ…コメ欄コメ欄！」

「盛り上がってる…でもこれからしゅばーらは何処に住めば…」

凄い女々しくなってるやん。てか一人称まで変わるのかよ。凄いなライブウオッチ。

「…んー、分かった、(こうなったのは私のせいかもしれないし…)いい案あるからまず変身解こうか？」

「うう…分かったぺこ…」

〜変身解除〜

「(ほら！配信終わるまであっちの方向行って！)まあ、という事で…シユバルツのお家が壊れてしまいましたが、強いシエイドを2体倒せたので良かったです！」

あと、シユバルツはちよつと放っておいてあげてください…という事でおつジオー！」

「シユバルツ…大丈夫？」

「大丈夫なわけないじゃん…もう…」

ん？口調がいつもと違うぞ…？

『(ニユジオ様、今の彼女は精神的ダメージを受けすぎています。なにか食糧を持ってきましょう。)』

「(さて、今なんて?)」

『(食糧を持ってきましょう、と言いました。)』

「(いや、その、アイツの性別は?)」

『(…女性ですが?)』

『(え?どゆこと?ニユジオ君わかんない…)』

『(彼女は完全に見た目からして男になりきってますが、出会った直後、スキャンしたところ性別は女性でした。)』

マジすか(；・▽・)

「え?ねえ、シュバルツつてさー」

直後腕に激痛が走る。

腕を見るとそこにはモニターさんの手でホールドされていた。

「(何すんのさ!?!せつかくはつきりさせようと思ったのに!-)」

『(いけませんよニユジオ様)』

いてつ、デコピン食らった。

『(彼女は必死に性別を隠しています。それが今バレたら精神的ダメージが倍増する事は確定です。まず今もこの先もこの話題はタブーとしましょう。)』

「(つまり…アイツの嘘に乗れって事か。《キメ顔》)」

『(?なぜキメ顔をしたかは分かりませんが…ワタシのサーチによると、この地域には甘くて美味しい果実があるそうです。それを探して彼j…いえ、《彼》に渡しませよう。)』

「(OK、そのクエスト受注させてもらおうか。)おーい、シュバルツく!」

彼女を呼ぶと泣き腫らした目でこちらに近づいてきた。

「ちよつと見てろよく、(インベントリ…)行くぜ!」「スキル:大工の勘!」

ログハウス建築の時に余った資材と得た新スキルで寒さをしのげそうな空間を数分で作る。

「な、何それ…?」

「シュバルツ、人は戦闘が全てじゃないのさ。というわけで僕はちよつとヤボ用済ませてくるからそこで待つてな。

…あと、防寒具。使わせて貰うよ!」

ちよつとした決めポーズをとって、甘くて美味しい果実、とやらを探しに走る。

「絶対そこから離れるなよ〜!」

そう言いシユバルツに手を大きく振る。それに続きモニターさんも手を振る。

さてオタカラを取りに行きますか！

《努力した天才》

「さてと…で、モニターさん。カッコよく飛び出して来たのはいいけど件の果物ってどこにあるのさ？」

『…確か雪山の雪の浅い所に生えているらしいです。』

「うん…ちなみに聞くけどそれ、どこ情報？」

『私のスキルです。』

「え!?!モニターさんスキル持ってたの?」

『言い返してみると《機能》とも呼べますが…』

「マッピング機能とかレーダー機能とかも?」

『その通りです。今回私が使ったスキルはニュジオ様が家を作っている間にスキルシステムにも秘密裏に残量エネルギーに注意しながら作り上げた、そう、おr「オリジナルスキル!」…それです。』

「すごいじゃん!オリジナルスキルまた作ったのか!…まあ1週間くらいモニターさんにお休みあげてたからか…」

『と、言うわけで作ったスキルの名前は「ゲツシングトゥールLv1」です。』

「ほうほう、(モニターさんが作るスキルは全部横文字なんだな…)意味と能力お願いしやす!」

『意味は《真実の推測》。このスキルを使えば私の様々なスキルの効能を高めたり新たな機能を見いだせることができます。…まあまだLv1なのでそんなに万能ではないですが…』

でもそんなスキル作れるなんて…シユバルツも凄いけどモニターさんも凄いな…そしたら僕の価値は…

『ニュジオ様、もしかして自分のことを卑下してますか?』

「…心を読んだの?」

『いえいえ、ただの《推測》ですよ。ネガティブなオーラが出ていましたので。』

うーん…やっぱりモニターさんには敵わないなあ…

『…と、言うことではここからは正式にニュジオ様の出番ですよ。』

え?…何の話?

『ニュジオ様からのデータが欲しいんです。』

「なんのデータ？」

『ニュジオ様のお得意のスキルの中に「雑草博士」というスキルがあるのをこの間偶然見つけたのですけど…』

「ほう？うん、あるよ？」「雑草博士」でしょ？」

『そのスキルと私の「ゲツシングトゥルー」の波長を合わせたらより植物の詳しいデータが手に入るはずですよ。』

「なるほど…で？どうやんのさ？」

『地面に生えている雑草に手をかざしながらもう片方の手と私の手を繋いでください。』

「な、なるほど…（初めての手を繋ぐ相手がモニターさんになるとは…

！）まつ、まあ、うん！よろしく！」

『じゃあそこら辺の草を対象にしてみましよう。』

「わかった。えーと、手をかざして…で！モニターさんと手を繋ぐ…と…」

え？なんで僕システム相手にドキドキしてるの？

『はい、繋ぎましょう（ギュツ）あとは集中して「雑草博士」を使いましょう。』

なるほどなるほど…集中…モニターさんの手って意外と華奢でスベスベしてるなあ…紛い物であるのに少し暖かいっていうのもいい…って痛たたたた！

『なんか別のことに集中してませんか？』

「あ…はい、今度はちゃんと集中頑張ります…」

よし、今度こそ集中して…「雑草博士」を意識して…ん？

これは?!凄いや!!

《閃いた凡才》

こ、これはスゲー！

まるで地面の中で成長する根みたいに感覚を伸ばせて地中の状況が分かる！

『上手くいったようですね。』

『なんか感動するわー、で？ここから何をすれば？』

『一旦地上を見渡して山を探しましょうか。』

そう言われてぐるっと辺りを見渡す。少し遠くに高そうな山を発見した。

「あつたあつた、そしたら…あの山に向かってこの《感覚の根》を伸ばせばいいのか！」

正解です。と、言われたので早速もう一度トライ。かなりの速さで地中を駆け巡る《感覚の根》はついに山へ到達し、目的の植物かもしれない根っこを見つける。

「この根だけなんか違うな…よし、「雑草博士」の草の名前が分かる効果をここで…」

『それは危ないです！』

え？、と思つた瞬間、一気に沢山の草の情報が入って来てかなりの頭痛に襲われた。

頭痛の痛さで言葉にならないような声を出して、その場で転げ回り、何度も吐きそうになった。すると、モニターさんが慌てたように説明をする。

『ニュジオ様！貴方が出した《感覚の根》は長い腕じゃなく長い手なのです！』

そこで名前等を鑑定してしまつたら、目当ての植物に到達するまでに触れてきた植物の根の全ての名前と使い道が分かってしまい、その膨大なデータに脳が耐えきれません！』

な、なるほど…つまり普通と違う植物だということが分かつたら鑑定しないでそつちに赴け…という事だったのか…

でも…

「モニターさん、…もう1回やらせてくれないかな？」
『?』 どういう訳ですか?』

「まあ理由は聞かないでもう1回やらせてよ。」

『まあ、それなら』

差し伸ばされた手を繋ぎもう一度《感覚の根》を目当ての植物に近づける。

…1度あの痛みが来ると分かればもう大丈夫だ…よし!

「鑑定!…うおおおおお!」『!?』

「あ”あ”あ”あ”あ!”」『WARNING!今すぐやめてください!』

「い”、や”、なれでぎだ!」『WARNING!WARNING!危ないです!』

「よし、もつと根を伸ばすz…あ”あ”あ”あ”あ!”」

『何がしたいのですか!?!推測不能!』

「…ふうこんくらいで良いだろう。果実の場所も分かったし、あとは…来い!」

《「ギフト:マジで草生える」を贈りました。「スキル:植物博士」とVエネルギー『1』を追加しました。》

『!?スキルシステムからのギフト?何故?』

「モニターさんさあ、「寒さへの耐性」って、確か寒いところに長時間滞在してゲットできるんだよね?」

『確かにそうですが…!まさか!?!』

「その『まさか』さ!あの状態に長く耐える事によって植物に対する熟練度を一気に上げたんだよ。」

『そんな、無茶苦茶な…』

「むちやくちやだとしてもどうせ苦難の先に成功があるのは変わらないよっ!」

そう言っ僕はモニターさんにぎこちなくウインクした。

《努力の賜物》

「いやはやこんな雪山に登るなんて人生初かもなー。シユバルツだったら登ったことがあるのかな?」

『さすがにこのサイズの雪山に登る機会はそうそう無いでしょう。』

「あーでも、スキー場の山と違ってこんくらいかなあ…?」

『…《すきーじよう》とは?』

「え?知らない?んじやあここはひとつ、僕がモニターさんに教える番だね!」

僕達2人:いや、1人と1システムは、お目当ての果実を探す為に、その果実がある雪山を登っていた。しかし道中は何も無いのでちやうど暇を持て余していたところだった。

『なるほど、ニュジオ様がいた世界にはそのような遊びと場所があるのですね。』

「モニターさんって意外と僕のいた世界の知識って、実はあんまりないの?」

『ニュジオ様との日常の会話で苦にならない程度の知識はありますが…』

「そうかー。ん?でもマネーシステムのおっちゃんは凄い知識持つてるよなあ…。マネーシステムの昔の話とかされた時、ずっと書物読んでたよH A H A H A くみたいな事言ってたからなく。」

そんな事を言って、ちよつとだけあのうるさいのを思い出す。

『…マネーシステムで思い出しましたが、あのシステムは《この世界にあるもの》も売ってるとか小耳に挟んだのですけど…』

「…それで?」

『それを使えばすぐ果実が手に入るのでは?』

いいところついてるね〜モニターさん…でも

「ん〜甘い!キャラメルくらい甘い!ちよつと効率的に考えちゃってない?」

まず、よく考えて！お店で買った野菜と自分で育てた野菜ってどっちが美味しいと思う？！」

『…お店の方が格も高くて安全でいいのでは…』

「ツスウー…ま、まあ確かにそうかもしれないけど僕からしたら愛着が湧いてる物ほど美味しいと思う！

じゃあ対象を変えたら…ログハウス！

売ってるログハウスと自分で作ったログハウス！どっちが良い？」

『…要は人間と言うモノは自分の手で作った物の方が愛着が湧き、そして素晴らしく感じる…という事でよろしいですか？』

む、モニターさんには分かって貰えなかったか。でも…

「まあ、これは1つの理由にすぎないよ！もう1つ理由あるからさ、モニターさんも分かってくれるはずの理由だよ。

つまり…」

『つまり？』

「果実が成っている場所の土壌などを調べ！土を持って帰り！そして栽培する事だあ！」

『なるほど、それなら理にかなっています。いくらなんでもあのマナーシステムと言えど、その土壌の細かい部分まで再現した物は無いはずです。』

有ったらあのおっさんのこと崇拜するわ…

「ま、何事にも今は努力。天才にはなれなくても秀才にはなりたいたらね…ってあれ？」『おや？』

目の前にあるのは白く綺麗な果実が実っている細木。これは…

「植物博士」！」

「白恋びやくれんの実…甘味をとでも多く含む、美味で少し珍しい果実。※詳細」

「ついに努力が実になった！」

『…それは…かなりサムいですね。』

「？雪山だから寒いんじゃない？」

とにかく上手くいったぞ！

《崩れる！流れる！雪崩出る！》

「これが白恋の実…って白イチゴじゃない？これ。」

そう言っただけは少し訝しげに果実を見る。どう見ても種が赤い白イチゴにしか見えないな…。

『確かにそう言われると《いちご》という果実に似てますね…』

モニターさんはあまりイチゴについても知らないらしい。国民的果物なんだけどなあ…

「実は数えて…5個か。シユバルツ用に二つ…栽培用に二つ…そして試食用に1つ。」

数えて見ると少ない。希少性は高いのだから当然だろう。

「じゃあ食べてみるか…（モグモグ）ん？おおお！

ときめく様な甘さにきらめく様な程よい酸味！これは…悪魔的だ…」

自然と次の実に手を伸ばして…しまいたくなるがここは我慢だ。

「さてと…土壌についても学ばなければ…土をすくって…アイテム名は…？」

「土」

「予想どうりだな…家に帰ったら土について学ぶ方法を考えよう。…インベントリ！」

そう言っただけインベントリの中に白恋の実と白恋の細木、そして大量の土を入れる。

『要件も満たしましたしシユバルツの元へ帰りましょう。』

そう言っただけモニターさんが帰り道を先導する。

「アイツ今頃何してるのかねえ…元に戻ってくれてたらいいんだけど…ってうわっ！」

痛った！滑ったわー、うー、お尻痛い…

『あつー！ニュジオ様、危ないです！』

慌てたようにモニターさんが言う。

「ああ…足元には気をつけるよ…」

ふー。おしりの部分だけ高性能スーツだからちべてー

『そうではなく！ニユジオ様！後ろ！』

そう言われて後ろを向くと雪がこちらに…迫ってきてる？

…『雪崩だ！（です！）』

そう理解した瞬間、僕は変身し、モニターさんを脇に抱え急いで下山する。

「ああ…何しちゃったんだろオレ…」

シユバルツは一人木箱の様な物に入り雪や寒さを凌いでいた。

「昔っから体力あるだけのバカって事はこっちの世界に来てても変わらない…か。」

そう言いながらシユバルツは顔を俯かせる。

「あのNewジオウとか言うヤツ、戦闘に関して弱いからへぼいやツかと思ったら…こんなの作れるのか…」

シユバルツはそう言って木箱をなでる。

「アイツ…《変わったヤツ》って言うオーラしてやがる…アイツはどこかで変わった…新しいジブンに変身できたんだろうな…少し羨ましいな。」

シユバルツの独り言は続く。

「オレもアイツを見てたら変わるかな…？変身できるかな…？誰かに認められるのかな…？」

今度は天を仰ぎシユバルツは物思いにふける。

突如凄い音が鳴る。外に出てみると少し向こうの山の雪が崩れて来ていた。

「!?あっちって…ニユジオが行った方向じゃねえか！」

シユバルツは走り出した。

「ニユジオ！大丈夫か!？」

シユバルツは山の近くの木に寄りかかっていたNewジオウを見つけた。

なんて弱々しい顔だ。仮面越しからでも表情は見える。

Newジオウはシュバルツに気づくと笑顔でこう言った。

「ハハハ…ちよつと滑っちゃって…」

シュバルツは確信した。コイツは不思議な強さを持っていると。

そして自分の事を変えてくれるかもしれないという事を。

《頼り頼られ》

「とにかくオマエが作った箱に行くぞ！立てるか？」
シュバルツは力強く拳を握りしめこちらを向く。

「いや…それが、身体に力が入らないんだ。」

思い返せば急な下り坂を滑りながら全力疾走だったからな…

「なるほどな…黄緑のへんなのいるか!？」

ん？それモニターさんのこと？

『私の名前は補助システムですよ…大丈夫です。私はニユジオ様に守って頂いたので…』

少し悲しげにモニターさんはそう言った。

「ならへんなのは動けるな！じゃあ…よつこらせ…つと」

まだそれで呼び続けるんだ…つて思ったらいきなり持ち上げられた。つてこの持ち方は…

お姫様抱っこじゃねえか！

「ええ…」

おんぶでもいいのにわざわざそつちかよ…と思ったら

「よし…快速で行くぞ!!ぬおおおおお！」

凄い速さで仮拠点に向かって走っていく。凄いな破人は。

あと振動で痛いんだがまあいいか…

無事に仮拠点についた訳だがまあここで治療させて貰うとするか。

「よし、インベントリ。えーと薬草傷薬…」

そう言っつて自前の傷薬を取り出す。

「おいニユジオ、それはなんだ？」

少し訝しげにシュバルツが聞いてくる。

「これ？自分で作った傷薬だけど？」

と、言っつてシュバルツに見せる。

「す、スゴい！オマエつて家だけじゃなくて薬も作れんのか？やっぱりオマエはオモシロイ！」

シュバルツは目をキラキラさせてこつちを見てくる。そんなにすごいことかな…？

「ハハハ…あ、それなら今薬塗るから、この草と同じ物を集めてきてくれたらシュバルツの傷薬作るよ？」

と言いつつ薬草を見せると、いいのか!?!、と言わんばかりに速攻で集めに行つた。

そろそろ薬草の在庫がなくなってきたから作製代として少しだけ取ってきた薬草頂くか。

「取ってきたぞ！」

元気にシュバルツが帰ってくる。出会つた時よりこちらに対しての警戒心が薄れた気がする。

「こつちも塗り終わったしそつちも怪我とかあれば塗っておいたら？
…まあ僕はその間にここでしか生えてない草とか見つけに行こつかな？」

一応見られたくないということもあるかもしれないし草を取りに行くとしてしよう。

で、見つけたのは多かつた順に「薬草」「ポカポカ草」「ハーブ草」「辛み草」そして「粉雪草」の五つ。

帰つてきた頃にはシュバルツも薬を塗り終わり、その後、手製薬の作り方を教えた。

「いやー、なるほどなー！オマエはアタマの回転がスゴいな！…ところで忘れてたが、オマエは何を取りに行つて来たんだ？」

よし！そろそろ見せますか！僕の努力の結果を！

《ご賞味ください！我の努力を！！》

「実は雪山まで行って何を取ってきたかと言うと？」

と言いつつドラムロールの真似をしながらインベントリの中に手を突っ込む。

「ジャン！これは「白恋の実」って言うすごく美味しい果実だよ！元気出してくれるといいなって思ったから取ってきたから食べてみて！」

そう言つて僕は自慢げに白恋の実を渡す。

「ほう：イチゴに似てるな：美味そうだ。オレは甘いものに目がないんでな。貴重な甘味、食べさせてもらうぜ。」

シュバルツはそう言いながらヘタを取つて白恋の実を食べる。

「な、なんだこれ!? たったの小さい一粒の実のはずなのに甘酸っぱさがギュツと入つてやがる！スゲー！」

一粒食べ終わった彼女はもう1つ食べていいか？と言う目でこちらを見てくる。

「食べていいけどこれでおしまいだからね！」

そう言うのと少し悲しげな顔をしてもう1粒食べる。悲しいって言つてたけど、食べている時は嬉しそうな顔してる。

と、その時モニターさんに通知が入る。なんだ？と、思つて見ると

《ライバー名：シュバルツからの好感度が上がりました。》

との事。：なぜそれをわざわざわざと通達してくるのかは分からないけどまあいいか。

「それより、これからシュバルツはどうすんの？ここじゃ雪や寒さを凌ぐしかないけど、もし良かったら——」

そう話をしてしていると遠くからドスン、ドスン、と音になる。シュバルツは様子を見てこようとする僕を止めた。

「今、足音がなっているのは外にいるスノーゴーレムで、名前は「冬將軍」だ。」

そう言いシュバルツは眉間にしわを寄せる。

「スノーゴーレム：。ゴーレムの一種か。：でもゴーレムって生命体

が作って何かを守るために命令してるもんじゃないのか？」

この間モニターさんから聞いた話からしたら少し違う気がするんだが。

『ここからは私の出番ですね。』

満を持した様にモニターさんが言う。

『あれはこの地域の《環境》が自身をゴーレムとして具現化させた特殊で名前付きのスノーゴーレム、「冬將軍」です。』

環境が自身を具現化させた…？

『要はこの地域の化身です。異例なのでゴーレムコアはないです。まあ操り人形みたいなものですよ。』

なるほど。でも…

「そしたらよ、へんなの。アイツは何を守ってるんだよ？」

僕の思ってた事をシュバルツが言ってくれた。シュバルツも、そこまではわからなかったみたいだ。

『生態系を脅かす存在や外部の者からこの地域を守っているそうです。』

へえ。

「なるほど…だからこないだオレのこと攻撃して来たのか…」

へえ。…じゃないわ！

「シュバルツ戦ったことあるの!?!」

「あるけど名前しか分からないまま強すぎて撤退した。あと1人いたら勝てただろうな。」

そんなに強いのか…

「あとアイツ人工物を極端に嫌うんだよ。だから拠点は洞穴にしないといけねえんだよなー」

待て待て、今なんだった？人工物を…？

そんな事考えてたら突如木箱が揺れた。何者かに上に持ち上げられてる様だ。

「コイツは…いよし、シュバルツ！配信&戦闘準備だ！」

「乗った！」

そして僕達が入ってる木箱は地面に打ち付けられた。

《雪原大戦争 (1)》

「ふう危なかった…」「危ね危ね、っと」

避難場所が壊れる直前に変身できて良かった。体の回転で木片は全て弾いたから何とかだった。

…まあだからなんだって話であってこれからの身の危険はほんどん上がってくださうからね。

「…こんなデカいのどうやって倒せば…?」

相手の身長は軽く3m超えてるし洞穴前で戦ったシエイドが付いていた氷の鎧が分厚い氷の甲冑として再現されている。これもコイツのスキルなのだろうか。

相手の武器は氷の大斧。直感でわかるけどあの武器はヤバい気がする。深く当たると傷が大変な事になりそう。

「おい、ニユジオーコイツは子分を召喚してくるから今回はオレが子分を引き付ける！オマエはその観察眼と勘で冬將軍を解析してくれ！」

僕に大物を任せるとは相当前回の戦いは難しい戦いだったんだろ。うな。ここはシュバルツの言う通りにしよう。

まずは…『甲斐田晴!!』

「その甲冑、割ってやる！」

シュバルツ side

よしよし、ニユジオのヤツがやつと戦闘態勢になったな。

冬將軍のヤツは相手が戦闘態勢に入ると、急に子分兵を出してくる。オレの役目はソイツらがニユジオに手を出さないようにおびき寄せるコトだ。お？出てきた出てきた。そろそろか。

まさか、いつも狩りに使ってたスキルをここで使うとは思っても無かったがアイツらを引き付けるためには…これだ！

「ウォークライ」発動！はああああッ！」

これで気が小さい子分兵共は「スキル：ウォークライ」通称ヘイト稼ぎに反応してこっちに来るはず。

よし、来たな、来たは良いがさすがに多いな…

何かアイツらを弱体化させたいところだが…ん？この音はなんだ？アイツらの動きが重くなってきたぞ？まさかニユジオか？アイツは一体なんなんだ…？

ニユジオside

「YEAH！僕の！音を！聴いてくれーッ！」

ちよつとノリノリになりながら僕は「オブスタクルギター」のエレキギターバースジョンを引いている。この音には敵対してる者に対して動きを鈍くさせることが出来る。

つまりこの技を使えば僕は相手の動きを見切りやすくなるし、シユバルツはシユバルツで樂にあのちっちゃいなまはげみたいなのを倒せるだろう。

…だけど少ししか冬將軍にはこの音が効いてないっぽい。まだまだVエネルギーが足りないのかもしれない。

そんな事を考えながらバク宙ジャンプで相手の足元すくいを回避する。(ギターを弾きながら)

ともかくわかってきたことは子分兵が倒されると新しい子分兵がまた冬將軍の体から出てくること。

これでスタミナや魔力を減らせればいいんだけど…はつきりとした解決方法ではない事は確かだ。

そんな事を考えながらサイドステップで相手の縦斬りを回避する。

(ギターを弾きながら)

まだまだ戦いは続く。

《雪原大戦争 (2)》

「のわっ！んっ!?隙あり！（エディット エコー!）」

そう言って僕は冬將軍の氷の甲冑をオブスタクルギター アツク スモードの振動でガリガリと削っている。

「ぐっ、コイツ…図体デカいくせに動きが速い…あっ！スパチャセン キュー！」

筋力や精神力アップ、そして気力回復ができるスキル「スパチャへの礼儀」を使う。

「オイ！ニュジオー！ギターの音くれ！」

シユバルツも大量の子分兵相手に少し押されているらしい。多少焦りながらギターの音を奏でる。とても難しい状況、つまり今、この状態はジリ貧だ。

でも活路はある。

『シエイカータイム！』《月ノ美兔!》

「いきますよー！」

そう言って甲冑の甲斐田の力でひび割れた部分に向けて一撃入れる。そうすれば少しだが甲冑の一部が剥がれる。

これをもう何回も繰り返している。

そして多分、次が最後で甲冑は全て取れるはずだ。

そこにオブスタクルギターを喰らわせる。あとは念の為に…

「シユバルツ！ペーらのブーツの力でアレ蹴って割ってくれ！」

「オシー！そのまま突き破ってやらあ!!」

『《ぺこつと!》デイメンションバースト!』

「月兔流 百裂脚ぺこお!!」

割れる！割れる！そのまま突き抜け！

そう願ったところ最後の氷が剥がれる。このまま相手の体を突き抜けられるか、と思った矢先、冬將軍の体に大穴が空いた。

「よっしやー！」

歡喜の声を漏らす僕に対してシユバルツは戸惑った様に声を出した。

「いや、おかしいペこ！当たってないペこ！」

当たってない…？

そう思った瞬間子分兵たちが粉雪となり冬將軍はそれと同化してどこかへ去っていった。

「なんだペこ！逃げるのか！」

シュバルツが怒りの声をあげる。多分冬將軍は甲冑の復元の為にどこかへと飛んで行ったんだろう。

「シュバルツ：アイツは今の僕達じゃ勝てない相手なのかもしれないよ…」

「そんな事ないペこ！逃げなかつたら倒せたペこ！」

「それは…解析の達人に聞くしかないね。モニターさん、御用だよ。」

そう言った僕の前に物陰から隠れていたモニターさんが出てくる。

『私は陰から相手を解析していましたが、氷の甲冑が剥がれた時、相手の能力値は上昇していました。』

「と言うと？」

『相手は私たちのことを好敵手として認めて、また戦いに来るそうです。』

「意味わかんねえ！なんなんだよ…逃げやがって…」

『シュバルツ、今のあなたとニュジオ様では奴には勝てません。相手が逃げてくれただけ感謝するべきです。』

「くっ！」

「兎にも角にも、アイツを超えるためには修行も大切かもしれない。

…だが、実は僕達、この地域に隠されているライブウオッチを探しに来たんだ。そのうちふたつは君のだろうけど、自身の強化の為に探しに行かないか？」

「…そうだな、希望があるのなら行こう。」

こうしてライブウオッチを探す旅が始まった。

聖者の挑戦編

《出発準備》

ん？どうした？俺は今から会議だが…？雪原の話の続きを知りたい？…そうかそうか。ちょうど話の続きは持つてるよ。

えーと…どこに仕舞って置いたかな…右ポケット…左ポケット…胸ポケット…尻ポケット…インベントリにも…無いなあ。あとは…ああ！帽子の中に入れてたよ！すまんすまん。じゃあこれね、落とさないようにな？

あ、やばいやばい会議に遅れる…どんな時でも俺は王様だから威厳を保たないとね…

と、言う事で急いで会議に行かせてもらうよ。じゃあ、また。

…次はどんな仮面ライダーが良いかな…ブツブツ…デザイン重視で…いや無骨なデザインでも有りか…ブツブツ

「と言う訳でポカポカ草を食べながら体を暖かくして目的地へ向かうぞー。質問ある人〜？」

冬將軍からの戦いが一旦終わってから間も無いが、早速目標の場所へ向かう事にした僕達一行。

ここからはモニターさんのリーダー機能を頼りに、新たなライブウォッチを探しに行くところだ。

「質問ならあるが。」

シユバルツが手をあげる。

「この草…食用なのか？」

シユバルツが質問ですねえ。

「僕の「植物博士」によると、すって塗るのもありだし、食べてもいいって言ってますが？」

そう言う少しシユバルツは少し唸る。まだ真実味が無いのかな？

「まあまあシユバルツ、んじゃ一つ聞くけど、有名なRPGゲームにド

●クエってあるだろう？そのドラ●エにき、MP回復の為の「魔法の聖水」ってあるじゃん？あれって自分にふりかけてるのかな？それとも飲んでんのかな？どっちだと思う？」

少しどうでもいい議論を出す。

「まああれは使ってるとしたか表示されないからな…そこは考えた事無かったな…。ってそうじゃなくて俺は…なんつーの？まあ要するにオレ、野菜嫌いなんだけど…。」

シユバルツはそう言った。野菜が苦手なのか…まあシユバルツが言いたいことはわかる。こんな山菜とも呼べない雑草を食べて大丈夫なのか、と言う事だ。そうか…

「なら間を取ってすったポカポカ草を肉と一緒に食べる。これでいいか？」

軽く状態を込めて提案してみる。

「んー、まあバジルソースだと思ってる食べればいいか…？」

その発想は無かったわ。

「まあちよつと味的にピリ辛らしいけどそれも有りっちゃ有りか。じゃあそれ食べてから出発するか…。今は雪降ってないし…焚き火も出来るし…ああ、後で松明とか作ってみるか。木の在庫も少ないしな。じゃあ準備開始！」

明日からは冒険だ！

《雪原、なのか…?》

翌日

「いや、見事に雪降ってんなあ…昨日のうちに十分に木を切っておいてよかつたあ…」

歩きながら安堵の声を漏らす。

「オイ、私もちやんと狩りしてきたが?」

自分もちやんとやることやったぞ、的な感じな目線でこちらを見てくるシユバルツ。

「いや、食料が必要なのはシユバルツだけじゃんか。」

「おおん? そんじゃあ怪物と戦闘になったらオマエだけで戦えよ?」

「イヤ、マジすんません助けてください。」

このようなどうでもいいことを話ながら歩いていくとふと、不思議な変化に気が付く。

「…あれ? ここら辺少し雪の中に雨降ってない?」

そう言っ僕は手を目の前に出してみると、微かに雪の中に雨が含まれている事がわかる。

「確かにそうだな…。オイ、聞きてえことあるんだけどへんなのいるか?」

まだモニターさんの事をへんなの呼ばわりしてるよ…

『…せめて呼び出されるのはニユジオ様からがいいんですが…。』

少し不満げな雰囲気醸し出しながら目の前にモニターさんがパツと現れる。

「あー、んじや質問は僕から言わせてもらうけど、ここって雪原と他の地域の境い目なのかな?」

僕達を感じた率直な疑問をモニターさんに聞いてみる。

『いえ、ここは雪原の中で唯一雪が降らないエリアとなっております。…推測ですが目的地が近くなってきたのではないのでしょうか?』

モニターさんはそう推測した。モニターさんは推測などをより強化するオリジナルスキルを持っている。って事はその通りなのかも

しれない。

「つまり、へんなのが言うには目的地はこの地域にあるってコトなのか？」

シユバルツはそう言って手を前に出す。

「ほとんど雨になっちまったな…その防寒具脱いだ方良いんじゃないか？」

僕の着ている防寒具を指差しながらそう言う。

初めてシユバルツに会った時よりもシユバルツが狩ってきた獲物の皮でかなりの進化を遂げた防寒具、確かに結構雨に濡れて重いかも。

そう思いつつもの特殊パンイチスタイルに着替える。

「オマエ…やっぱそれしか服ねえのか…。」

「いや、シユバルツだつてずつとその特殊スーツじゃん。」

「あ、そうかオレもか。」

そんな事言い合つてるとまた不思議な変化を感じる。

「…いや、脱いだのはいいけどそれにしては暑くない？」

そう、暑いのだ。どんどん歩く度に暑さは増す。

「…確かにこの特殊スーツ越しでも少し暑いな…雪じゃなくて雨が降ってるのもそのせいか。ん？…あれはなんだ？」

そうシユバルツが言って指を差した場所には遺跡のようなものがある。

「どうやら目的地に到着したみたいだね。」

今度は遺跡探索か！

《謎の記録》

「これが遺跡…正面から見ると壮大だね。」

目の前に見えるのはやたらと炎のような装飾が多い遺跡。

遺跡の前には古びた石碑があるが読んだ事もない文字で書いてあるので分からない。

「すげえ『火』って感じだな！てゆうか、こりやなんの文字だよ？」

シユバルツも同じことを考えていたようだ。これに詳しい人なら

：

「モニターさんこれ読める？」

もうモニターさんに丸投げするしかないよね、これは。

『いえ、知らない文字ですね。』

案外サツと答えが返ってきた。え？モニターさんでも読めないの

？マジか…

「とりあえず中に入ろう。やるしかないよ。」

この中に目的の物があるんだ。進むしかない。

「じゃあ出発！」

〜10分後〜

「いや…石版にもなにか書いてあるよ…なにか読む方法はないかな…？」

これには唖るしかないな…

『私に解読機能とかあれば良かったんですが…すみません…』

そうやってモニターさんは少し画面を俯かせた。

「解読ねえ…んー。ん？あ、そうだ。」

ちよつといい事閃いたぞ。

「[エディットコントロール：日本語字幕]！」

そう言うのと石版の前に日本語の文が浮かび上がる。成功したのか

！

「読める…！読めるぞ！」

「ほお、オレには見えないがなんか見えてんのか。」

『そのようですね。』

「ふむふむ：んー、よく分からないけど音読しますわ。」

えーと…

「へ記録：我々にはやらなければいけないことがある。それは生命体としての限界を超える事、そして世界の理を改変する事。それらを我々が達成する事で世界、いや、それ以上のなにかに接続できるのだ。」

「…は？」

シユバルツは間の抜けた声を出した。そりや当たり前だな。いきなりなんの話題か分からない文出されたらそうなるよな。

「とにかくこれは…誰かの記録って訳か。って事は、この世界に誰かいるって言う裏付けになるわけだ。」

まあこの世界に来てから、焦げて壊れた家を見てから何となく感じてたから驚きはないけど…やっぱいるのか…。

『「いる」、と言うよりもこの遺跡の状態からして見たら「いた」、という方があっている気がします。』

確かにこの遺跡は結構年季が入ってる気がする。うん、モニターさんの言う通りだな。

「で、でも…あそこの炎ついてるぞ…！」

シユバルツは少し怖いのか分からないけど火のついた燭台を指さす。

…確かに燭台には火が着いている。って事は誰かいるんじゃない？

『2人とも落ち着いてください。あれはこの世界で取れる、火のついたら永遠に燃え続ける水から火が出ているだけですよ。』

「そんな物があるのか…すごいな異世界って…」

『気になるのでしたらマネーシステムが売っているのではないでしようか？』

「まあ気になるけど今は遺跡探索だよ。ほらどんどん行くぞー。」

まだまだ探索は続く…

《遺跡の守護者》

「うーん…沢山石版とかあるけどほとんどの内容が信仰のような話だな…。」

そう言つて僕はまた一つ石版をモニターさんから受け取り、内容を解読する。

また同じような内容だな…。

『なにか新しい内容はありましたか?』

僕が少し難しい顔をしてたからか、モニターさんが聞いてくる。

「いや…毎回似たような文だなーって思つてさ。ところでシュバルツはなにしてんの?」

シュバルツも僕のように石版とにらめっこしている。

「ニュジオが出来んならオレだつて解読出来るはず…ぐぬぬ…あー! わかんねえ!」

そう言つとシュバルツは石版を素手で碎いてしまった。

「おいおい…貴重な古代の文献を壊すなよ…。まあ僕が読み終えたやつだから良かったけど…」

モニターさんが作ってくれたオリジナルスキル「エディットコントロール」がないと、やっぱり容易に解読は出来ないようだな。モニターさん様々だね。

『ニュジオ様、この先広間があります。生命反応はありません。』

「広間か…よし、シュバルツ、もう行くぞー。」

シュバルツは、おう、と返事をしてついてきた。何かあるのかな…。

「ここが広間か…何も無い…つて事は無くちやんと宝箱がある…けど…。」

部屋の中央に質素な箱があるけどどう見ても罫にしか見えないのだが。

「シュバルツ、あれ開けんなよ?」

「は?…宝物の気配がプンプンするじゃねえか?開けるに決まつてるだろ。」

「いや！あれ絶対、罨だから！」

なんて事を口論してたらモニターさんが話かけてきた。

『あの…なにか箱から出てきましたよ？』

「え？」

よく見ると箱の中から球体が浮かんできた。すると、いきなりその上から砂が落ちてくる。

「なんだあれ…ってシユバルツ!？」

不思議に思いながら見ていると、シユバルツがジゲンドライバー

ニユクスを取り出している。…って事は？

「やっぱり罨かよお…」

そう言いながら僕もジゲンドライバーをインベントリから取り出す。

砂は球体の周りを大きく覆い尽くし、装飾された見た目が変わっていく。

『気をつけてください！あれはガーディアンの上位種のゴーレムです！』

なるほど…つまりあの球体はゴーレムのコアか。

「さしずめアイツは遺跡の守護者ってところだな…シユバルツ！配信の準備できてる？」

「もちろんだ！あの野郎、オレの期待を裏切りやがって…タダじゃ済まさねえ！」

いや、勝手に宝物期待してたのそっちだし…とぼっちり食らって怒られてるゴーレムが可哀想に思える…。

「って事で行くよ!!」

「変身!!」

久々に体が回転して変身が完了する。

「君はもうブラウザバック出来ない！」

「貴様はここでシャットダウンさせてもらう。悪く思うなよ？」

こうして遺跡の守護者との戦いは始まった。

《炎操者の試練》

「とりあえず相手の分析からだね！シユバルツはこっちの防衛！モニターさんはアイツの説明よろしく！」

『わかりました。アレは「シェイド名：サンドゴーレム亜種」です。』
「あ、亜種…？」

『あのシェイドは炎を操る力があるみたいです。よって、普通のサンドゴーレムとは違うので亜種です。』

「いや…どちらかと言うと亜種よりも《炎操者》えんそうしゃって言う二つ名の方がかつこよくないか!?と思う、シユバルツ？」

「そんなことツ…そんなこと言っていないでツ…さっさと加勢しやがれエー！馬鹿ニユジオ！」

あ、やべ、シユバルツの事忘れてた。息絶え絶えじゃん。
「すまん！今行く！」

そう言っただけ勢しようとしたところ、ゴーレムの口から一瞬なにかのチャージ音が聞こえた。

(まずい！)

咄嗟に体をひねらせて回避したが、火球を口から発射していたみたいだ。

『今のが火の魔法です。普通のゴーレムは魔法は使えませんので亜種ならではのですね。』

そう平静を保ちながらモニターさんが言う。もうちょい危機感持った話し方をして欲しいのだが。

「シユバルツ！体勢を整えるぞ！シェイクで挑もう！」

月ノ美兔ライブウオッチを使い月ノ美兔シェイクとなる。

シユバルツの方は兎田ぺこらシェイクになった。

「とにかく攻撃して相手に隙を作らせましょう！」

そう言っただけツキノキネで攻撃すると相手の腹部が貫通した。

「よし…この調子で…」

そう言っただけのもつかの間、熱砂に攻撃される。まずい！

「違うぺこー！アイツはオマエの攻撃に合わせて体の形を変えたただけだ

ぺこ！カントンにアイツの隙は作れねえぺこよ！」

シュバルツはそう言いながらキャロケットブーツの加速を利用して私を攻撃から救い、相手との距離を置いた。

「じゃあどうすれば!？」

シュバルツに抱きかかえられながらそう聞く。

「今考えてるぺこ！とりあえず、相手のコアに攻撃を当てるぺこ！補助は任せろぺこ！」

たしか相手のコアは胸部に位置してたはず。そこに攻撃すれば…

「じゃあ必殺技ですね！」

『《それゆけ!》ディメンションブレイク!』

三日月の弓の矢として自身を放ち、相手の胸部をキックで貫通する。が、手応えは無かった。

即座に貫通した部分の熱砂で攻撃してくるのでまたシュバルツが私を回収しに来る。

「あのヤロウ、コアを腕に移動させたぺこ！これじゃあどうにもできんぺこよ！」

むむう、そう言われるとかなりピンチみたいですな。

「モニターさんはなにか策が考えられますか？」

もう、モニターさんに頼るしかない！

『相手は砂と炎なので水分はどうでしょうか?』

「水分なんて、飲み水として持ってきた分くらいしかないですよ！シュバルツは？」

「水分…? あー…うん。あまり自分の戦闘スタイルじゃないから忘れてたぺこ…だけどコレの力なら…」

そう言っつてシュバルツはあるものを取り出した。

『ゆきはな雪花ラミィー!』

まさかシュバルツがもう一つライブウォッチを持ってたとは…。

《神秘の粉雪》

「そんなライブウォッチ持ってたなんて聞いてないですよ！」

そう言っただけはシュバルツの肩を揺さぶる。

「いやー、戦闘スタイルがしゅばーらには合ってたから忘れてたと言うか…ぺこ。」

なんて話をしてたらサンドゴーレムが殴ってきたのでツキノキネで相殺する。

「とにかくちやちやつとシエイカータイム！それまで私が何とか抑えますから！」

そう言うときシュバルツはドライバーから兎田ぺこらライブウォッチを外しポーズをとり始める。

こつちとしては早くして欲しいけど配信のためならしょうがない！

『雪花ラミィ！』

《シエイカータイム!!》

「どうも！仮面ライダーシュバルツです！こんらみ！」

シエイカータイムの回転がおさまって出てきたのは淡い水色のリングヘアーに花の飾りをつけ高貴な衣装を着たシュバルツであった。

「なるほど、細部のメカニカルな装飾がないとホントにラミィさんに見えますね…」

ちらちらとシュバルツを見ているとサンドゴーレムの口からチャージ音が鳴る。

「危ない！」「法器：小衛星DAIFUKU」召喚！」

シュバルツがそう言い放つとこちらに撃たれた火球を不思議な雪玉が消し去った。

シュバルツの近くに浮いていたのは雪花ラミィのお供であるだいくをモチーフにしたような物体だった。これが召喚できるアイテムなのか…。

「二ュジオはまだ下がってて！シュバルツがどうにかするからね！」

また一人称とか変わってるなあ…まあとにかく任せましょう！

「いくよ！吹き溢れて！粉雪！」

小衛星DAIFUKUから大量の雪が放出されるとそれに抗うかのようにサンドゴーレムは炎を振り回しているが量が量なのでどんどん火の息は消されていった。

「相手が湿ってる今こそチャンス！ちよつとニュジオ、コアに向かって攻撃してみて！」

なにか策があるようだがとりあえずサンドゴーレムの胸部に向けてツキノキネを振り落とすとドサツと湿った砂が落ちるがコアはない。

「ゆっくりだけどコアが移動してる！…そこ！」「氷魔法・アイシクルランス」！

今度は臨時で追加されたであろう氷魔法をコアが移動して膨らんでいる部分である脚部に放つ。

「ニュジオ！完全にはコアを壊せなかったみたい！あと一撃お願いね！」

なるほど、つまり今撃ち込んだ氷柱は《釘》の役割という事みたいです。つまり…

「次こそ！」

そう言つてコアに刺さった氷柱に渾身の一撃を振り落とす。

サンドゴーレムは少し呻き声をあげたかと思うとボロボロと崩れ去っていくのを見ながら決めポーズをとり、一言。

「起立、気を付け、着席。以上Newジオウがお送りしました」

「それではおつらみ〜！」

こうしてサンドゴーレム亜種との戦いは終わったのであった。

《対抗の熱き力》

「ふう…何とか倒せましたね…つと」

そう言いながら私、いや変身解除したから『僕』、だね。慣れって怖い…

変身解除した僕はとても気になってた事をシュバルツに聞く。

「そのライブウオッチいつから持ってたのさ？」

当然、雪花ラミイライブウオッチの事だが、出会ってから数日経つが使っているところを見たことがなかった。それ故に気になる。

「あー…、この間オレが1人で冬將軍と戦ったって話は覚えてるよな？」

たしか2人で冬將軍と戦う前に遭遇して戦ったと聞いていたのを思い出す。

「普通1人じゃアイツに歯が立たないのはわかるだろ？なんであの時生き残ったかと言うと、アイツの懐に一撃入れたらこのウオッチがそこから落つこちてきたんだ。」

なるほど、その戦いで手に入れたという訳か。

「ウオッチを落としたらアイツ逃げてったんだよなー。そんで命からがら助かったってワケ。」

シュバルツが生き残れた理由もわかったがまだ知りたい事はある。

「なんで今までそのウオッチの力を使ってこなかったのさ？狩りにも使えたんじゃないの？」

僕は月ノ美兎と甲斐田晴のウオッチを最大活用してるからこそその疑問をぶつけた。

「いや…オレって、殴る蹴るとか近接攻撃が好きでな…。遠距離攻撃だったこのウオッチは性にあわなかった。と、言う理由で使う事がなかったから忘れていた。」

コイツはウオッチの多様性を知らないのか…？

「あのさ…氷とかの力が使えるなら色んなこと出来るんじゃないの？例えば…かくかくしかじか」

「…そ、そんな事ができたとは考えた事なかった…！」

やっぱりアホの子だわこの人。

「つて気づいたら腹減ったし眠い！」

「その燭台の火を貰って肉焼いて食べなよ。こつちもすることあるからさ。…あとこんな砂まみれのところで寝ないですよ？」

あーい、と気の抜けた返事を聞き流しながら目的の物へ近づく。

「モニターさん、このゴーレムのコアってどれくらいの価値かなあ？」
床に砂と共に落ちていた割れたゴーレムのコアを近くに浮いていたモニターさんに差し出す。

『…大きさは普通より少し大きいですが純度は中の下ですね。火の魔力の力がほんのり感じられます。まあ新しいゴーレムのコアを作る
ことがあつたら素材として使いまししょう。』

なるほど、さすがモニターさん。1発で分かるとはすごい。

「ほいひゅひお、へあへのふふあほほば？（おいニユジオ、目当てのブツはどこだ？）」

「食べてから言いなさいよ、待ってるからさ…」

〜数分後〜

「ふう、食った食った…で？お目当てのお宝はどこだよ？」

これでもかという量の肉をたつた数分で食べ終えたシュバルツが聞いてくる。確かに見当たらないな…

『多分あの壁の向こう側だと思います。壁は隠し扉になってますね。』

「じゃあ早速、見に行くか…」

そう言いながら壁を押すと回転扉のように開く。その先にあったのは、2つのライブウオッチだった。

「2つか…じゃあ僕はこつちかな？」

『ドーラー！』

これはドーラーライブウオッチか…

「オレはこつちって決めてたからこつち！」

『不知火フレア！』

シュバルツは不知火フレアライブウオッチをとったようだね。

「よーし！帰って冬將軍との戦いに向けて作戦会議だ！」

ガッツポーズをしていたらシュバルツが一言聞いてきた。

「ニュジオ、ここになんか書いてないか？」

シュバルツが指差すところにはなにか文字が彫られている。

「えーと…「日本語字幕」…」

〈汝の戦いに幸あれ。〉

遺跡から外に出る時、色々な事を思い出した。

「あとアイツ人工物を極端に嫌うんだよ。」

人工物を嫌う…

「暑いな…」

雪原なのに雪の降らない暑い地域…

「ウオツチがそこから落ちてきたんだ。」

何故か冬將軍が持っていたウオツチ…

「壁は隠し扉になってますね。」

レーダー機能がないと分からない程の隠し部屋…

そして炎の力を持つウオツチ…

入り口を抜けて帰る時、ふと、まだ見てなかった石碑の文を見ている。

〈レデク研究所〉

ここは研究所だったのか…

そして下手な彫られ方をした小さな文を見つける。

〈やっと 気づいた？〉

「おーい！ニュジオ！さっさと帰ってゆっくりするぞー！」

「…うん、わかったー」

僕はシュバルツに追いつくように走る。

決して後ろを振り向かぬように。微かな笑い声が聞こえなくなるように。

僕は背中に多くの視線を感じながらただただ前を向いて帰路を走る。

《大戦の前夜》

「やっと一息、ってところだな…ハア。」

研究所からのほぼ1日かけて今の拠点である新しく見つけた洞穴に到着した僕らは疲れていた。いや、どちらかと言うと僕の方はものすごく疲れていた。

「うう…（なんだったんだあの研究所…霊か!? 幽霊なのか!?）」

もう肩とか重いしなあ…取り憑かれてないよね、僕？

「いやあー、オレあ膝ガクガクだあく。あー、なんか食べてえしそれにねみい…」

シユバルツは破人としてのリスクが響いてるようだ。ウトウトして目を閉じるかと思いきや腹が鳴ってその音で起きる、と言う謎の現象を起こしている。動物かなんかかコイツは？

「とりあえず僕が肉焼いとくからゆっくりしててよ。」

「マジか…恩に着る…」

「でもいつもより草のサラダ多めね。」

「えー…でも今はどうでもいいかも…ふあああ。」

ほう、それくらい疲れてるのか。暖かくして眠れるようにポカポカ草を多めに入れるか。…辛いかもしれないけど。

とりあえず焼きながら明日からの予定を考えるか…。明日あの冬將軍をおびき寄せる為の建築物を作るか…。できるだけ目立つようについていう事と、早めに相手の到着を知れるように高見やぐらを今回の建築物として考えておこう。

「…おっと、考え事してたらもう肉が焼けてた。…あとはポカポカ草とかの草をこの石のナイフで千切り…:とかこの切れ味なら千切りと言うよりただのちぎりだな。いつか金属製のナイフ、欲しいなあ…」

そんなこと考えつつジャコジャコとナイフを動かしながら

シユバルツへの夕食を作っていた。

「シユバルツ、肉焼けたぞ。皿（石）に置いとくからなー。」

(ぐぐぐ)

腹の音で返事しやがったぞ…ってあれ？

コイツ…寝ながら食事してる…お前は少年マンガの登場人物かなかなのか…？…それにホントに女性なのか疑いかかってきたぞ…。「…とりあえず僕も寝るか。シユバルツ、おやすみ。」

…ここは、どこだろう…あれ？まだ僕歩いてたっけ？

見渡す限りここは…森？

辺り一面綺麗な緑が広がっていた。少し遠くにまだ幼い少女がいる。

ねえ、君ここどこ…っていきなり走り出すなよ…

おい…待ってたら！

少女を追いかけていくと村に着いた。村の人達は賑やかに話あっている。

すいません…ちよつと聞きたいことが……って無視された…

村の人達にはどんなに話かけても僕がいないかのように無視される。残念に思いながら向こうを見ると少女が手を振っている。あの子について行くしかないみたい。

ちよつと待ってよ…早いって……この装飾どつかで見たことあるような……？

少し涼しくなってきた。どうやら大きな洞穴の入り口みたいだ。汗を拭っているつるはしを持った人や、難しい顔をしている人がここには多い。

ええ…ここ入っていいの…？危ないから待ってってば！

少女はどんどん先へ進む。それに自分について行く。そうこうしていると洞穴の最深部に着く。つるはしを持った作業員たちが一心不乱に岩を削っている。少女はこれを見せたかっつらしい。少女の顔を見るが何故かよく見えない。

…一体何なの…？ん!?

突如上がった作業員の声に気づいて前を見ると岩の中からなにかが見える。

それはどんどん発光していき、僕はその中に引きずり込まれた。

《再戦》

『…さま…ジオ様…ニユジオ様。起きてください。朝ですよ。』
頭に何度もほすほすと手刀が入る。

微かに瞳を開けるとモニターさんが目の前にいた。

「あ、ああ、もう朝か…」

そう言いながら少しこわばった体を起こす。

『少しうなされていましたが、なにか悪い夢でもありましたか?』

モニターさんはこちらを心配そうに声をかけてきた。

「夢…夢ねえ…確かに変な夢は見たかも。」

夢のくせにくつきりと覚えてる。あんなにリアルな夢は久しぶり見た気がする。

「つて、今日はそんな事考えてる時間は無いな…。シユバルツはもう少ししたら起こしてやってほしい。僕はやぐら作ってくるからさ。」

わかりました、とモニターさんに了承を貰ったので早速作ろう。

どんな装飾をつけようか…つて壊される物に装飾は必要ないか…

「…あ、そういえばもう1つ頼みたいんだけど…」

少しして、起床と朝食が終わったシユバルツと共にやぐらを作っている時、遠くの地域に異変を感じた。

よくよく見ると魔法陣から大量の雪が出てきて、それはどんどんと見覚えのある形に成形されていく。

「ニユジオ! あれつて…」

「わかっている。冬將軍だね。もうおいでなすったか…」

遠くに見える巨大な人影はゆっくりと、このやぐらに近づいて来ている。さてと、迎撃準備の始まりだ。

鼻先がツンとするような寒さの風の中、標的の足音はどんどんと大きくなって来ている。

視線の先には雪で作られた巨大な武者がいる。数日ぶりの再会だ。

「それじゃ…」
「配信開始」。

開始すると同時に待っていたかのようにコメント欄にコメントが現れる。

「さてと、じゃあ行くよ。シュバルツ。」

「今度こそ逃がさねえ！」

冬將軍はこちらの準備が終わるまで待っているようだ。あくまでも武人なんだな。

それじゃ…

「二変身!!」『ライバータイム!!』

『カメーンライバー！ニユ〜ジオーウ!! SAY! Y A—!』

『カメンライバァー！シュバルツウ!…大黒天!』

「君はもうブラウザ逃れることはバック出来ない!!」

「貴様はここでシャツト強制終了ダウンさせてもらおう！悪く思うなよ？」

変身が終わると冬將軍は大斧を取り出し、大きな咆哮を一つあげて、前回同様子分兵を大量に出してくる。

「さてと、こちらにも新兵器使いますか！」

「そうだな！容赦しないぜ!!」

『ドォーラ!!』『不知火フレア!!』

『シエイカータイム!!』

「おはドォーラ！Newジオウじゃぞ！」

「こんぬいー！シュバルツだよ！」

と言う訳で戦いの始まりじゃ!!

《雪原大戦争 (3)》

— ニュジオside —

「おー！これがドーライブウォッチの力か！体の全身に強大な力が湧いてくる！わしの炎が迸る！これなら…負ける気がしないのじや！」

そう言い、手を握りしめると手が炎に包まれる。

「うわっ！熱…くない？」

『(臨時スキルで「炎熱無効」を入手しているので大丈夫です。)』

なるほど、ありがとうモニター殿。…某海賊漫画の主人公の兄達が炎の能力を手に入れた時ってこんなリアクションになったんだろうかの？多分そうじゃと思う。

「その氷の甲冑、すぐに溶かしてやるぞ！」
「武具：ドレイクナギナタ」
召喚！」

そう叫ぶと空から目の前に向けて薙刀が落ちてくる。それを掴み相手に斬撃を放つ。

バシユウ！と音を出して冬將軍の甲冑に斬撃が入る。よく見てみるとちやんと溶けていた。

「この間が嘘みたいに切れるな…冬將軍、覚悟を決めよ！」

そこから炎の薙刀と氷の大斧との攻撃の攻防戦が始まる。しかし、相手の使っている武器は大斧。渾身の一撃でこちらが打ち負けてしまった。

「だが武器が一つだと思ふなよ！」
「火 竜 吐 息」！

燃え盛る炎の息を吹き、冬將軍の兜を全て溶かす。冬將軍は表情こそ変わらないがまるで焦っているようにその頬に溶けた水が滴った。

— シュバルツside —

「前回のようには行かないぞ！子分兵共!!」

今回こそ炎の力が宿るこの力でアイツらをボコボコにしてやるぞ

！

「武器：細劍 琴椿」
召喚！」

そう言つて召喚したのは可愛い謎の生物の装飾がされたレイピアだった。

「今の体の素早さなら一氣にいけるかも…喰らえ！」ミリオンプレイム「乱撃炎突！」

素早くて的確に放つ炎を纏った刺突は多くの子分兵達を一瞬で行動不能にさせた。

「この力なら乗り越えられそうだね！あつ！そっちに行くなってー！」
「スキル：ウオークライ！」

咆哮を放つとどんどん周りに子分兵が集まってくる。

「囲まれた！なら…」バーニングダンス「猛火連舞！」

踊るように回りながら周りを切っていく。この技で全ての子分兵を倒し終え、Newジオウと冬將軍の方を見ると冬將軍の氷の甲冑はほとんど溶けきっていた。

「ニュジオー！こつちは終わったよ！後は…」

シユバルツは甲冑が無くなった冬將軍を見る。

「ここからは前回の続き、と言う訳じゃ。無論逃げない、いや、逃げられないのだろう？子分兵が生き残ってないと、お主は雪に紛れて移動はできんはずじゃ！」

確証はある。前回は冬將軍が逃げる前に子分兵達が雪となり、それに紛れるようにして冬將軍は逃げ出していった。

つまり子分兵は冬將軍にとっての乗り物と言う役割をしているということだった。

「お主だけで逃げる事はできるだろうが、その体の遅さでは上手くは逃げられぬじゃろ？」

「さあ！お主の本気、見せてくれ！」

倒してやる。今度こそ、絶対。

《雪原大戦争 (4)》

冬將軍の甲冑を壊し、子分兵を全滅させた。ここまでは予想内だ。ここからコイツはどんな行動を取るのか分からない。

「まずは先手必勝じゃ！火竜の力を受けてみよ！」

正面からドレイクナギナタを振り、冬將軍の顔を目掛けて大きく振りかぶる。が、炎を纏った薙刀は冬將軍の両手で力強く止められてしまった。

「なっ！白刃取りか!？」

相手の手は雪で出来ている。薙刀から出る炎で雪が気化して水蒸気が出ているが、それでも尚、ものすごい力で薙刀を止められている。そんな中、突如腹部に衝撃が走る。呻き声を上げながら後ろに飛ぶ。

「おわっ！大丈夫？ニュジオ!？」

咄嗟に行動を取ったシュバルツに受け止められた。

「な、何とかじゃ…ゲホっ。少し相手の隙を作るからその間に攻撃を加えてやってくれ…喰らえ！」フアイアードレイクブレス「火竜吐息!!」

口から炎を出して冬將軍を牽制する。

「わかった！纏え、火竜の炎！でやあっ！」

シュバルツはブレスを突破して相手に飛びかかる。

「ドレイクブレスラッシュ火竜閃連突!!」

自分の炎にフアイアードレイクの炎を纏わせてシュバルツは連撃を放つ。この連撃で相手は大ダメージを受ける。

当たれば、の話だが。

「コイツ…変幻自在かよ!？」

冬將軍の体は刺突の一撃一撃を見極め形を変える。

そして今度はシュバルツの体を掴みこちらに投げってきた。

「ぬっ、危ない！」

空中でシュバルツを受け止める。一撃も冬將軍に届かない。この現実には2人の心に大きなダメージを与えた。

次の瞬間シュバルツに向けて冬將軍の拳が迫る。

「うっ！」

「喰らわせるかあっ!!」

その一撃を張り手で抑える。

「シユバルツ！ここで折れちゃだめじゃ！立って次の手を考えないこと！」

「…勝てなくてもか？」

「そんなの…お前さんらしくないっ！シユバルツはどんな時でもわしの前を行くやつじゃないのか！」

シユバルツはそれを聞いて戦慄する。

「わしだって怖い。もう心が折れる寸前だ。だけど絶対にわしらが折れちゃいけない理由がある！それは—」

右手で抑えていた冬将軍の腕を左手で勢いよく折る。

わしは、いや僕は、どんな時でも笑顔で事に挑み達成しなくちゃいけない。沢山の人の希望を抱き、その希望を力に変えてまだ見ぬ難題へと挑む。

例え、どんな事を言われても。沢山失敗しても。激萎えしたとしても。

最後にはみんなと大きく祝杯をあげて大笑い。いつでも色んな色の煌めきを放つ存在。

そう、だって—

「僕らはVTuberだから！」

《雪原大戦争 (5) — Burning We So
u i —》

遡ること数分前。

『おいおい、あれ勝てんのかよ!?!』

『シユバ様でも無理ゲーか』

『大丈夫かなあ』

コメント欄は悲観的なコメントで賑わっていた。

—だが、Newジオウのある一言でコメント欄は異常な程の盛り上がりを見せた。

『そうだ! それでこそライバーだよな!』

『お前らならゼツタイ勝てる!』

『最後まで見守ってるぞ!』

『俺達も負けてられねえな!』

『今度はこつちが支える番だ!』

熱狂的な燃え上がりを見せる視聴者の心からの祈りや決意の煌めく炎が今、システムに大きな力を与える。それはシステムを駆け巡り、一つの形に変化する。

『『『頑張れ! ライバー!!』』』

《ビツ、ビビツ、「ライバー名: Newジオウ」から《王の素質》を感じ。それに伴い「擬似シェイド名: レギオン」から多くの信仰に似た波動を感知。》

「なんだ…? 僕の体から炎が…?」

気付くと僕は通常のフォームに戻っていて、僕の周りには煌めく炎が燃え盛っていた。

シユバルツを見ると、寝ており、煌めく炎の治癒の力で受けた怪我がどんどんと癒えていつている。

さらに冬将軍の場合はその炎に絡みつかれて動けなくなっていた。

そして—

《秘閣されていた「クラウンシステム」のロックを解除します。》

「クラウンシステム」を「家臣・補助システム」と混合化させます。〈
クラウンシステム解放を祝し、ギフトとして「宝具・聖王銃剣 キラ
メキレード」をスキルに追加します。〉

「これからのご利用をよろしくお願い致します。〈

…なんでだろう…なんだか…いけそうな気がする!」

これまでもない自信が溢れてくる。

「宝具：聖王銃剣 キラメキレード」召喚!」

そう言ってスキルを発動させると煌めく炎が右手に集まり、1本の
剣の形になる。

「よし…じゃあいくよ『祝いなさい!!』んえ!」

突然モニターさんが大きく声をあげる。…あれ?少し装飾が変
わってモニター部分に顔文字が映ってる…?

『全ライバーの意志を受け継ぎ、次元を超え、ライバーの煌めきをしろ
しめす聖なる王者。その名も仮面ライバーNewジオウ。まさに生
誕の瞬間である!』

なんかすごい聞いたことのある構文なんだけど…

「(…で?もう戦っていいの?)」

『あ、はい。…すいません、何故かこう、言わなくてはいけないよう
になってしまいました…』

クラウンシステムと混合化されたせいなのかな…?

「まあそれはいいとして…冬將軍、勝負ツ!!」

「ハッ!セイッ!」

前よりも冬將軍の体にダメージが入っている気がする。

「こういうのもそろそろ使えるかな!」

そう言ってエディットコントロールの準備を行う。

「[エディットコントロール：1.5倍速]!!」

そう言い放つと体の動きが早くなる。

「ツ!でも体への負担があるな…無理やり加速してるような…」

そんなことを言いながら冬將軍を斬っていくと少し小さくなって
きた冬將軍がいきなり距離をあけてきた。

「…雪を集めてる?」

冬將軍の頭上に雪玉が作り出され大きさはどんどん大きくなって
いつている。

「あんなの当たったらひとたまりもない…

ならー！こつちも遠距離だ！」

手に持っているキラメキレードを銃の形に変形させる。

『ジュー!!』

そして投げられた大雪玉に銃撃を何発か当てて壊す。

「今度はこつちの番だ。」

キラメキレードを剣の形に変形させる。

『ケン!!』

そしてキラメキレードのくぼみにドーライブウォッチをはめる。

『ディメンションナルコラプス！ドロー！キラキラスラッシュユ！』

「あばよ冬將軍！はああッ!!」

キラメキレードの炎はドーライブウォッチの力によって大きくなり冬將軍を飲み込んで冬將軍を溶かし尽くす。

斬った後に冬將軍のいた場所を見ると、そこには綺麗な雪玉が一つ、地面に落ちていた。

《終戦と將軍の記録》

「ん……？」

シユバルツはまだ眠たげな目を少し開けて呟いた。

そこにはこちらを心配そうに見てくる1人と1システムがいた。

「お、やっと起きたか……！心配したよ、まったく……。」

と安堵の表情を見せ、Newジオウが言う。

『どうやら聖なる炎の治癒効果はしっかり作用してるようですね。』

こちらは装飾が豊かになった補助システムが傷を調べている。

「おい、オレ達……勝ったのか？」

「勝った、大金星だよ！でもシユバルツが寝ちゃったから僕の勇姿が最後まで見られなかったみたいだね。」

「あの炎がなんか暖かくてな、久しぶりにゆっくり眠れた気がしたぜ。」

「いや、さすがに戦闘中眠られると困るんだが……。」

『ごもつともですよ』

戦が終わわり、やっと気の抜けた会話ができるようになり自然と笑みがほころぶ。

「ところでシユバルツが寝てる間に、性能が向上したモニターさんをお願いしてたことが終わったんだよ。」

「……？」

『私から説明をさせていただくと、冬將軍との戦いの前に、ニユジオ様から、戦後に冬將軍の記録を解析して欲しいと言われていました。幸い冬將軍はコアの様な“コレ”を落としていたので、解析は簡単でした。』

と、補助システムは手に持っている綺麗な雪玉を見せる。

『前に言ったように本来、地域の情報から得られてた冬將軍のデータからは冬將軍はゴーレムですがゴーレムコアは無いと、されていましたが、代わりに落としたのがこの「將軍の残雪」です。』

と、さらに補助システムは解説する。そして、

『私の推測からしてこれは、聖なる炎の力によって救われた冬將軍の魂みたいなモノだと。』

「救われた…?」

Newジオウとシユバルツは同時に声を出す。

『ええ、まあまずは私が見所を編集した冬將軍の記録をご覧下さい。』
補助システムの画面に映る冬將軍の記録。それはある種の日記のようなものだった。

雪と魔力から作り出され、殺戮を繰り返す日々。そして心^{意志}に芽生えた罪悪感との戦い。同じ作り出された心^{意志}の無い兵器達^{人工物}へのやるせない気持ち。

謀反を起こすために1人の男から貰った《狂戦士化》という呪い。謀反を起こすがサンドゴールム亜種の力によって敢え無く研究所から逃げる事となった事。

そして、暴走に飲み込まれ、長い年月、さまよい続けた事。

『冬將軍の最後の意志、それは自分^{人間}に出来る事である、造り手^{人間}を殺し造られた兵器達^物の手が汚れる前に壊す事。…それをずっと歪んだ形で覚えてた存在^{人間}が、先日までの冬將軍です。』

「…なんだよ、あんな凶暴な野郎なのにそんな事考えてたのか…。」

「まさに、やるせない」って言う感じだね…。」

そしてNewジオウはふと考える。

「いつか生まれ変わらせてやれるなら、次はへ壊すへんじやなくて何かをへ守るへ存在にさせてあげよう。」

それが僕にできる唯一の弔いだよ。」

そう言って「將軍の残雪」を優しく撫でた。

《帰ろう我が家へ!》

冬將軍との戦いが終わり数日間たった。当初の目的であったライブウォッチの回収は成功し、さらにクラウンシステム、という謎のシステムを解放出来た。もうこの地帯には用は無いらう。

「…と、言う訳で僕達は家のある草原地帯に帰ろうと思うんだ。」

まだ探索していない所もあるかもしれないが目的は達成している。その為、もうここにいる必要は無い。

その旨を朝食を作りながらシユバルツに伝えた。

「…は？」

シユバルツは寝ぼけているからか話が理解できていないようだ。すごい困惑したような目でこちらを見てくる。

「僕はまだ色々知りたい事や、やりたい事が沢山あってね…。約1ヶ月間くらいかな？ホントにシユバルツにはお世話になったなあ…」

「…オマエこの洞穴だつてかなり装飾もしたじゃねえか…ここがオマエの家じゃダメなのか？」

…そう言われると結構愛着はあるかもしれないけどねえ…

「世話になったつてのはコツチだ！ニユジオが家に帰りたいのはわかるけどよオ…！こつちだつて言いたいことあるんだよ！」

…なんだ、寂しいのか。やっぱり最後は女性らしく寂しいって言ってくれるのかもしれない。

…しかし、僕がいなくちや寂しい…か、元の世界では言われた事無いな…。まさか…好きでしたとか!?

「オレ…」

うん！

「オレの…!」

うん!!

「オレの面倒は誰が見てくれんだよおお！」

う…うん？

「え？なに？寂しい…とかじゃなくて？」

「いや…それもちよつとはあるけどよお！」

ちよつとなのかい！

「…毎朝起こしてくれて、毎回メシ作ってくれて、しかもうめえしよお！その他にもかくかくしかじか…」

「…つまり、世話係がいなくなるのがイヤ、と？」

「おう。」

…期待してた僕が馬鹿でした。やっぱシュバルツはシュバルツだわ。

「よし！こんなやつはほつといて家に帰るか！モニターさん！」

『同意。』

「いや待ってくれよお！」

突如後ろから抱きつかれる。これは予測してなくて体が硬直した。

「オレ…言葉にするのよくわかんねえからなんて言えばいいのかわかんねえから何となく言っただけどよお…」

オマエがどつか遠くに行っちまうっただけでモゴモゴするし、オマエの事考えると胸が締め付けられるし…！

この服は気温とか感じないけど…オマエといるとポカポカする！じゃあオマエがいねえと…冷えるだろおが！」

…シュバルツはそういうのってなんて言う感情なのかわかんないのか…？

「…なんなら僕達の家に来る？」

「…え？…いいのか!？」

「あー、幸い寝室が一部屋空いててね…まあそれでいいんだっただけど？」

「もちろん！少しは働くから！連れてってください！」

「よーし！それなら善は急げだ！えーつと防寒具の準備っ…！…しかし、シュバルツが繕ってくれた防寒具は最後までお世話になるなあ…（しみじみ）」

(ニユジオ！オマエはカミサマが作ってきてくれた、最高の防寒具だ！
！ずっとお世話になるぞ！)

聖王の初心編

《王への道》

…かくしてやっと草原の拠点に帰ってこれたんだ。まあここから拠点周りを拡張や整備をしたりして今に至るんだが…まさか国と叫べるほど大きくなるとはね…。今更ながら驚きだよ。

…ところでこの俺の記憶の内容、ちゃんと映画にできそうなのか？
…国を造って繁栄してきたから、記念に映画にしてみようって君が言ったのだけど…ちゃんと上手くいくのか？

まあ君が出来るというのなら信じるが…よし、これが次の記憶だ。
…ん？いつもの様になにか用事があるんじゃないかって？

ああ、今日の机仕事は休みなんだ。たまにはゆっくり休んでくるかな…

「ついに…ついに戻ってきたー！」

実に約1ヶ月の遠出からなんとか家に帰ってきた。特にシエイドからの攻撃も無く、家にはダメージは無い。強いて言うならばちよつと家周りの草が伸びていて目立つかもしれない。でもそれは後で刈ればいい。とにかく帰ってきた！

「なかなかちゃんとした家だな。…なあなあ、オレの部屋見に行ってもいいか？」

シユバルツは家にたどり着くまで《自分の部屋》というワードを度々口にしてそわそわしている。

まあ、僕と一緒にいた時はプライベート空間がなかったから嬉しいのかも。

見えてきて良いよ、と声をかけシユバルツが自分の部屋を探しに行つたところで家の近くに腰掛けてモニターさんと呼ぶ。

「モニターさん、クラウンシステムについてそろそろ学ぼうと思うんだけど…いいかな？」

『はい、私に混合されたクラウンシステムにはランクがあり、王らしい

事をしていけばランクが上がり、それに伴いニユジオ様の力も上昇します。』

「…それだけ?」

『今、私にも分かることはそれだけになりますね。』

そう言つてモニターさんは映つている顔文字を困っている様に変えた。

「王様らしい事…例えば国作りとか?」

そんな素朴な疑問をモニターさんに言つてみる。

『いや、どんな王でも国をいきなり作ることは無理でしょうから…まずは村作りから始めて見るのはどうでしょうか?』

確かにごもつともな答えが帰ってきた。

どうでもいいかもしれないがこの世界に来る前に海外の国作りゲームにハマったことがある。少しでもその知識が役に立つといいんだけど…。

「んー、そうだね。まずはなにか安定させないと…。その為にはなにが必要だろ…木材? 石材? 食料?」

少し色々と考えてみるが、いざとなると困るな…

『…まず確実に1番初めに必要なのは《技術》だと思いますよ。』

「技術…そうかあ…それなら呼ぶしかないか…」

うるさいのを承知で呼ぶしかないか。

あの《マネーシステム》を。

システム一同驚いたって…やっぱり意思のあるシステム達は時々集会でもしてるのかな？

『オット！話がそれたネー！で、ボクの予想なんだけど、今回の買い物…ズバリ、クラウンシステムが関係してるんじゃない？』

さすがマネおじ。すぐわかったか…。まあそつちの方が話が早い。「うん。当たり前だよ。まあ外で話すのもなんだし、うちにあがつてよ。」

そう言つて家に誘う。

『WOW！よく見たらこれ、ニユジオ君があの後作ったログハウスかい！？へえ…これがログハウスかあ。』

「え？見たことないの？」

『H A H A！当然システムは外の世界にはなかなか行く機会なんてないからね！まあ生で見るのが初めてつてだけさ！』

家に入るとそこにはシュバルツが床に横たわっていた。

嗚呼、そういや、コイツがいたか…

シュバルツはマネーシステムを見て一言。

「誰だお前」

果たして商談が上手く進むだろうかと心からそう思ったニユジオであった。

《同居人は小金持ち》

『おや？お初にお目にかかるね、ボクの名前は人呼んでマナーシステムだよ！…名前を聞いてもいいかな、マドモアゼル？』

「まど、も…？なんだかわかんねえけどオレの名前はシュバルツだ。システムってのはその黄緑のへんなの『補助システムです。』しか見たことなかったが黄緑のへんなの『いい加減覚えてください！』とは違うんだろ？」

シュバルツがへマドモアゼルの意味を理解出来なかったのはいいけど…まだ、シュバルツはモニターさんの名前を覚えてなかったのか…。

『うん、そうだねエ。ボクはカンタンに言えばみんなの経済と商売支えるシステム界の商人だよ！』

「そうかそうか…それはすごいな…。（なあ、ニュジオ、けーぎいってなんだ？）」

いや、知らんのかい。要するにお金に関することだぞ。
…まあそれはいいとして。

「まあということで、シュバルツとの自己紹介も済んだ事だし商談を—」

『いや！待つて待つてニュジオ君！ボクね！思ってたんだけど、このコからすごい魅惑的な匂いを感じるんだよ!!』

は？シュバルツから？

「え？おいニュジオ…まさか…オレって臭いか？」

「そんなに臭わないけど…？（おい！おっさんコラ！セクハラか!）」

『いやいや！そうじゃなくて！キミからすごいお金の匂いがするんだよ！キミ、お相当な額を隠し持つてるんじゃないの!?!』

なんだ、おそっちか…。

「はあ？…まあ金なんて、そんなもん使つてこなかったからな…えーとインベントリ、インベントリ…つと…」

気になったのでこちら3人も覗いてみる。

「んー、今んとこ、こんくらいだな。」

えーと、いち、じゅう、ひゃく、せん…

『『六百七十万円!?!』』

「え、それって僕の3〜4倍持ってない!?!どこでそんなお金手に入れたんだよ!?!」

「いや、決まってると思うがもちろん狩りと配信だぞ?」

「…ってもニユジオとオレとではやってる期間がこっちの方が長いからな。多分それだ、それ。」

いや、それだけじゃない。

圧倒的な格闘センスと狩りの効率、それを持つてるからこそその、配信の人気とシェイドから手に入る微々たるお金が、僕の何倍も積み上がって出来た金額なんだろう。

…まさかこの間、ヒモでいた宣言、略して「ヒモ宣」したシュバルツがまさか家主の僕よりも稼いでいたとは…

『…ミスターニユジオ? ダイジョブ?』

『これは…落ちこんでますね…理由は何となく分かりますが…』

『…ま、まあそんなことはいいとして! ニユジオ君! せっかくなら2人で協力してウチで物買っていきなよ! まだ話の本題には入ってないよ!』

確かに…なら、とことん色々やってみよう!

《豪快！シヨツピング！》

「…それじゃあ一通りシュバルツにもマネおじの出来ること教えたからそろそろ買いい物に移るかあ。」

先程マネーシステムがシュバルツに出来る機能を教えようとしてたけど、たぶん長くなるから、こつちから簡単に機能を教えといた。これでスムーズに買いい物が出るはず。

「色々とデータが欲しいんだよね…。まずは自給自足の生活がしたいから、農業についてのデータが欲しいところだな…。」

「ほお、農業か。確かに米食いてーな…。」

「いやいや、最初の作物が米ってレベル高すぎない？」

『OK、農業なら家庭菜園くらいからプロの業まで色々あるよ！自給自足したいならコレとかいい感じのデータパックだと思うよ！』

ふむふむ、土作り、水やり…やっぱ色々入ってるな。

「小麦作ってパンとかもアリだな。」

シュバルツよ、一旦穀物から離れようか。

「ん？「井戸の作り方」かあ。確かに近くの池から毎回汲むわけにはいかないしな…。「簡単コンポスター」、「益虫の見分け方」、「葉の病気」…。農業って大変だな、いつその事プロレベルまで買っちゃうかあ！」

『お！気前がいいねえ！さすがニュジオ君！なら、プロには良い作物！ってことでデイメンシヨツピングから高級な種買っちゃいなよ！』
「でもお高いんでしょう？」

『種くらいだったら送料まとめるから思うほど高くないよ！今ならその農業の知識と種、この位で買えるよ！』

「…おお？って、高すぎないか？これシュバルツの財産の七割はかかるんか。」

『え？？農業の知識ほぼ全部買うならこの位はかかるよ？』

いや、そこまで買うとは言ってないんだけど…。まずシュバルツがこの値段を許す訳ないでしょ…。」

「よしニュジオ、買え。」

「いや、良いの？めっちゃ高いけど…。」

「まだ見ぬ美味しい食材の為だ。買おうぜ！」

コイツはト○コかなんかなのか？

「おい、金ピカ、オレとへんなのも農業手伝うからそれに見合った知識も見積もりしてくれないか？」

手伝う気満々だな…ってモニターさんまで手伝わせる気!?

『OK!!だいたいシユバちゃんの所持金ほとんど使うけどいいかな?』

「どーせまた集まるから使っちゃまってくれ。」

『わかったわかった!じゃあ明日まで待っててね! see you again Tomorrow!』

こうしてマネーシステムが去り、僕の、というかシユバルツの買い物が終わった。明日から忙しくなりそうだと思う今日この頃であった。

『私も手伝うんですか…』

「オレ達の為にしっかり補助してくれよな！」

「オレ達」っていうかほとんどシユバルツが食べるから実質「オレ」でいいんじゃないかな？」

《新たな刺客とインストール》

「いなさつくく♪いなさつくく♪たーのしーみだー♪」

いやー、まいった。ホントまいった。

なんとつて朝からシユバルツがこんな感じだからなあ…。いつもだったら暇な時間は狩りに行くっていうシユバルツが、マネーシステムがくるまで家に待機しているという有様。ここまで農業…もとい米作りを楽しみに行っているとは思わなかったな…。しかも…

『ニュジオ様、腕1本で種を植える姿勢はこの様な感じでしょうか？』

まさかのモニターさんまで朝からこんな感じなんだよなあ。朝から家の床に向けてシャドー種植え。昨日は少し悩んでいたようだけど、なにかあったのかな？

「モニターさん、どうしちゃったのさ？吹っ切れた？」

『実はですね、ニュジオ様達が寝ている間、私の基本データの植物についての項目を見ていたんですが、その際に「電脳植物」なる項目を見つけまして、その中で非常に興味深いモノを見つけました。』

そう少し興奮気味にモニター画面に、ある画像を浮かび上がらせる。

それはまるでネジや電球のような形をした物体…いや、植物だった。

『この私のフレームに付いているモノみたいな物が種で、十分に育つたモノがこちらの実になります。』

モニターさんつて「ネジ」とか「電球」とかこの世界に無いものは知らないのか。一応教えておくか…。

『なるほど、ニュジオ様の世界の機械部品がコレによく似てるんですね！どうりで惹かれるものがあると思いましたがよ。』

「あ、少し聞きたいんだけどこの電球ってどこが果肉？まさかと思うけど…」

『この半透明な部分が果肉になってまして…で、この電線？が先程の種子に繋がってます。』

わーお、やっぱりそうなるんだ。

…なんかこの実を見てるとなんかデジャヴ感が…。あ、ヘルヘイムの果実か。

「…ねえ、この果実に対してモニターさんが思ってる感情って『めっちゃ美味しそう』じゃない?」

『あ、ニュジオ様もそう思いますか?』

「いや、そうだと『推測』したのさ。」

間違いないね、この果実、絶対システムの大好物だ。危険性があるかどうかはマネーシステムに聞いてみて、なかつたら育ててみるのも悪くないな…。

コンコン『Hee!o! ニュジオ君達いる?』

「うおっしやあ来たぜえー!」

今回から家にいる時はドアから入ってくるようにしたのか。

「お、いらっしやーい、ってそちらは?」

マネーシステムの後ろに十二単じゅうにひらたえのような物を羽織った独特な形の朱色のモニターがいる。…ってことは新手的システムか。

『今回は諸事情によってもう一人連れてきたよー! 名前は——』

『おい成金、自己紹介は妾がすると言ったではないか。コホン 妾の名は《アイテムシステム》。以後、よろしゅう。』

マネーシステムが『よっ! レイちゃん!』と、声を上げる。それに向かって『恥ずかしいからやめい!』と喝をいれる朱色の、—もといアイテムシステム。

なんか雰囲気からマネーシステムとは違う、ザ・マトモな人感がある。それでもマネーシステムとは違う派手さがあるけどね。

「こんな辺境までようこそ、アイテムシステムさん、僕の名前はNew ジオウ、気軽にニュジオとお呼びください。で、こちらは—」

「オレの名前はシュバルツだ! 種籾はまだか!」

『ご存知だと思いますが補助システムです。よろしくお願いします。』
なんだか口調が勝手に畏かしこまっちゃう。と、思っていたら

『いやいや、そんなに畏まらなくていいんじゃないや! むしろ謝りとうてのう…。』

え、なんかあったっけ？

『この成金のバカがいつもそちらに急に現れると言っていたもので…。心臓に悪い事をしてしまって申し訳ない。』

あ、そういう事ね、だからドアから来たのか。

「いえいえ、大丈夫ですよ！」

まあ確かに心臓に悪かったけど…このヒトがそういうのなら許すしかないな…。

『えー、ハデに登場した方がカッコイイじゃん…』ボソツ

前言撤回、やっぱ許さんマネおじ。心の奥でだけ。

『良かった良かった…ああ、妾の名は長いからな、妾の事は気軽に麗^{レイ}と呼んでおくれ。』

「わかりました麗さん。…で、どういったご要件で…？」

『実は色々と送る荷が多くての、キル坊…スキルシステムと相談した結果、マネーシステムがちゃんと仕事出来てるか視察に来たんじやよ。』『チョット！ボク仕事にはしっかりプライドがあるから手抜きはしないよって！』

…なんだろう、コイツ身内からも信用性ないって思われてるのか。

『マ、まあレイちゃんがそこまで言うならボクの仕事っぷり見せてあげようじゃないノ!!はいこれ！ちゃんとして事前にデータの整頓していたよ！ホラー！』

って言いながらモニター画面に文字の羅列を浮かび上がらせ麗さんに見せる。

同じ立場なんだろうけど、ここから見ると上司と部下に見える気がする。

『ーじゃあ気を取り直してインストール、いってみよう！まずはー』

「オレから先にやってくれ！」

『はいはい、シュバちゃん、じゃあイツツ インストオクル！』

そうマネーシステムが言うのとシュバルツはなにかに向かって反応してる。きつと《声》が聞こえたんだろう。

「よっし！これでオレもファイティング農家だぜ！」

なんだその妙にダサイネーミングは…

『じゃあ次は補助ちゃんねー、ヨシもう一発元気にイイツツ インス
トオ〜ルウ!!』

そう言われると、モニターさんは祈るようなポーズをとった。

『これが新しいデータ…早く解析したいですね…。』

モニターさんにも無事にインストールされたようだ。

『それでは最後に、ニユジオ君…は疲れたから叫ばなくていいか。
ホーイ。』

いや、叫ばないんかい！

『マネーシステムから多数データが届きました。大型インストールを
始めますよろしいですか?』

「はい」

『あ、ソウソウ、こないだも言ったけど大量にやる場合は頭痛が起きる
らしいから気を付け「アゝアゝアゝアゝアゝくあwせdrftgyふ
じこーp」てっ…アリ?』

こうして僕達はなんとか無事(?)にインストールを完了させたの
だった。

「許せ”ない”!」

『ゴメンゴメン(爆笑)!』

《電腦植物 とは》

『ヨシー！インストールは無事完了！って事で早速頼まれていた種の説明をするよ！』

確か買った種は大きく分けて2種類あつたはず。確か：

「元の世界の品種改良済みの作物の種と、この世界の原生植物の種だよな！そんなくらい覚えてるぜ！」

「そうそう、それだそれ。一体どんなのがあるんだ？」

『エート、確かこつちに…あつたあつた！まず、これがレタス、タマネギ、ピーマン、ニンジン、ジャガイモ…』

マネーシステムがそう言いながら色々な種類のポチ袋をモニター画面から吐き出す。

種類こそ豊富だがいかんせん量が足りない。これは頑張つて増やさないといけないな…

『…で、最後に特別枠の種ね。今のニュジオ君達ならこれらを立派に育てられるはずだよ！じゃあ次はこの世界の植物の種だねー！』

と、マネーシステムは言いつつMSPSで買った種の袋を出す。

『タレットビーンズの種、魔々タビ草の種、日マワリの種、バラカブの種、最後に、魔法使いのお茶会の種ね。』

いかにも怪しそうな名前の植物が沢山だな…。隣で袋開けてるシユバルツもすこし怪しんでるな…。

『あの…聞きたい事があるのですが、「電腦植物」について聞きたいのですが…』

『ほう、御補助は電腦植物に興味があるのか…まあ電腦植物はMSPSでは売ってない、自分達だけのモノ、売るとしたら高額…と、その成金なら言うじやろう。』

マネーシステムを見てみると凶星だったのか、明後日の方向を向いて口笛を吹いている。

『そんなにすごいのですか？』

『うむ、我らシステム、及びプログラムの好物であり、その存在を信じただ方へ強くさせ、悟りを開かせ精神をより堅固なものにさせる…まさ

に進化の果実であるのじゃよ。』

存在を強くさせる…つまりの事を言うと今のモニターさんより、古参のシステム達があらゆる力を持つのもこれのおかげ…というわけか？

『勿論、鍛錬や製作者殿の気まぐれでも強くはなれる。ちなみにこの成金はこの植物の実を貪り食って記録能力を上げ、他のマネーシステム候補生の頂点に登ったのよな？』

な、初耳なんだが。

『…その話はあまりいい思い出じゃないから思い出したくないんだけど…。』

この間話してくれたことの中にはなかったが、なにかワケがありそうだ。

『ふむ、そうじゃったの、という訳でお近づきの印にこれを植えてみんなか？』

そう言つて麗さんはネジの様なものを渡してきた。

これは電脳植物の種か…

『妾の呼び出し方を御補助に教えておくから新しい電脳植物の種が欲しければその果実数個と引き換えに交換してやろうぞ。では仕事も終えたい成金よ、帰るぞ。』

そう言つて麗さんとマネおじはドアから出ていった。

さてと、それじゃあ土いじりに行きますか！

『私の過去…理解不能…。私も試験があつたのでしようか？』

なぜ私はあの日、ニユジオ様の傍にいたんでしようか…？』